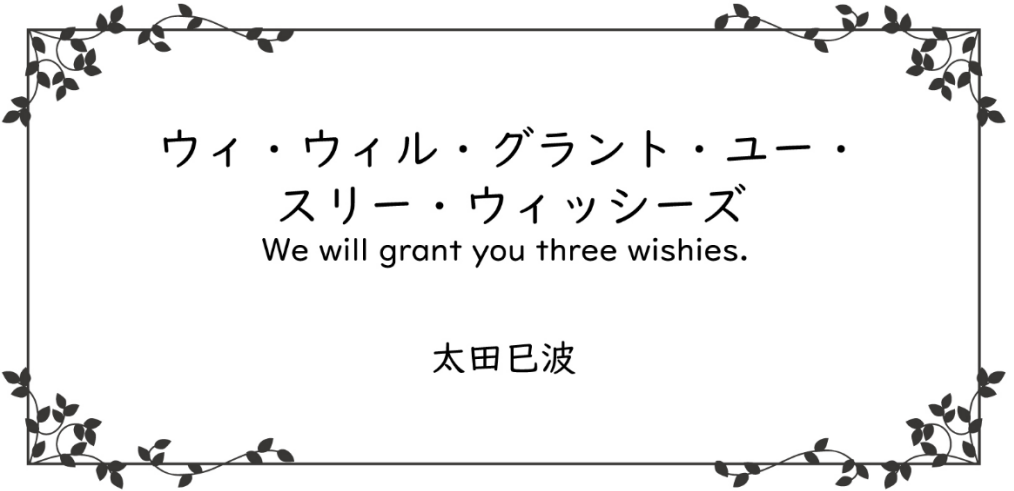


UeHAUP



The Darkside of my Mind. -01-
ダークサイド・オブ・マイ・マインド 01



ウィ・ウィル・grant・ユー・
スリー・ウィッシーズ
We will grant you three wishies.

太田巳波

ウィ・ウィル・グラント・ユー・スリー・ウィツシーズ

We will grant you three wishes.

ダークサイド・オブ・マイ・マインド 01

The darkside of my mind. -01-

「キュルルル。キュルルロ」

岩壁を背にした生き物たちはおびえたように鳴いていた。

狼はやさしげな声色を作ってもう一度問いかけた。

「あなたたちは誰。どこから来たの」

問われたつぶらな瞳は「キュルルロ」と再び鳴き声を上げた。そして、体の大きい個体が小さな個体たちを守るように背にかくまった。

「美月のその格好が怖がらせてるのよ」

狼の後ろにいた白熊が狼にフードを外すように促した。その促しに美月と呼ばれた狼は、頭にかぶっていた狼の頭の形をしたフードを跳ね上げた。

中から出てきたのは浅黒い顔だ。漆黒を思わせる短めの黒髪で、右目はやや吊り上がり、左目は黒い革の眼帯で覆われている。その女がわざとらしい笑顔を見せる。

「ねえ、あなたたちはどこから来たの」

美月は先ほどの言葉を繰り返した。ニタツと笑う美月の口からとがった犬歯の先端が顔をのぞかせている。

「キュルル。助けて、食べないで」

後ずさりしながら懇願する三人に美月は顔をしかめてしまう。

「まったく。子供相手にそんな恐ろしい顔したら、余計におびえさせるだけでしょ」

白熊が美月を押しつけ前に出ると、背をかがめて三人をのぞき込んだ。そして、熊の頭のフードをゆっくりと外した。長い白髪。透き通るような白い肌。優しげな丸い目。

「大丈夫だから、安心して」

そう伝える白い女を見て、おびえていた三人は目を丸くし、すがりつくように前に出てきた。

「助けて。助けてください、白い女神様」

「何故、私がモンスター扱いで、美雪が神様扱いなのよ」

おびえていた三人からの聞き取り調査を白熊の外套を羽織った美雪に任せた美月は、美雪の背後で憤慨していた。そして時折、威嚇するように美雪と話す三人を睨みつけた。

美月たちの属するグループ闇面《ダークサイド》の拠点はある山の中にある。

そのスペースの大部分は山をくりぬいた地中に存在していた。入口はいくつかあるが、偽装されている上に、人が簡単には立ち入れないような場所に設置されているため、拠点内に入り込まれることはほぼない。

闇面は総勢百名ほどのグループだ。生活と経済活動を共にする仲間で、彼

らはこの集まりをギルドと称している。

拠点の中には居住スペースがあり、メンバーの多くはそこで寝泊まりしていた。また、工房と呼ばれる作業場も用意され、そこでは工人たちが日用品や武器、防具を日々作り続けていた。作られた品は資金獲得のため外部に売られるか、作成に必要な素材確保を担当している戦闘組に渡されていた。闇面のメンバーは雑多な種族で構成されている。数が多いのは亜人種だ。獣人属、エルフやドワーフなどの妖精属。その他、オーガやゴブリン。亜人種について多いのは人間種。少ないながらもモンスター種でさえ何名か在庫籍していた。

ギルドの戦闘組の一部、白熊の毛皮の美雪、茶斑の犬、鳥人の男、女騎士、子供のおもちゃのようなポップなステッキを持った少女が、狼の毛皮を身に着けた美月と共に近くの洞窟へ調査を兼ねた狩りに出向こうとしていたときに、拠点に近づく生体を検知し、警報を発したのだった。

侵入者が小柄な三体だけで、危険が少ないと判断した美月は、侵入者の正体を見極めるため、集合していた戦闘組を引き連れ、行き止まりの岩壁の前で立ちすくむ三人の前に立ったのだった。

「ってことは、あなたたちは、その友達ってのを、私たちが助け出してほし
いってことなのね」

要領の得ない話が繰り返されるの聞いていた美月が、割って入って要約する。

「ハ。ハイ。そうです」

ワズ・バーンと名乗った年長らしいホビットが、ビクつきながらも肯定した。

三人の侵入者は美雪の誰何に対してこう答えていた。自分たちはホビットで庄を出て雪山を越えてきた。今朝、野宿から起きたら仲間の一人が谷に落ちていた。谷川の横には洞窟があり、そこから狼が二匹現れ、仲間を襲おうとしている。仲間は木に登って避けているが、木は細く、いつ落ちてもおかしくない。僕は助けを求めて走っていたら、ここに着いた。

話に出てきた洞窟はホビットたちが来た方角からして、美月たちが向かうとしていた洞窟だろう。ならば、助けに行くのに異論はない。

「その洞窟は河原の横にあつて、入り口近くに大きな岩が二つあるよね」

「ええと。ハ。ハイ。そうです」

ワズが思い出すように考えながら答える。その答えを聞いた美月も考えるようにブツブツと独り言を言っている。そして、しばしの思案ののち、美雪を見つめる。

「人助けに行くよ。女神様」

美月から厭味で女神と呼ばれた美雪は苦い顔でうなづく。

「じゃあ、一応道案内としてワズ・バーンは一緒に来て。で、ほかの二人はここで待って」

「こんな危険なところに二人を残して行けないです」

「急いで助けに行くんでしょ。ダッシュで行くから小さい子は足手まとい

だよ」

「でも」

「美月様、来たよ。何の用なの」

更なる反論をしかけたワズの発言を遮るように、若い女の声が出た。

声がある方向を見ると、ゴシックフリル服の少女と白衣の女性が森の中から現れていた。美月はワズを無視すると、そちらに歩み寄った。

「子供二人の子守をしてくれないかな」

「うん、いいよ」

フリルの少女が即答する。

美月は二人に十分近づくと声をひそめて告げた。

「ちょっとでも怪しげな動きをしたら殺して」

フリルの少女は半歩下がって美月を見つめる。

「怪しげか怪しげじゃないかの判断を教えて」

「そんなことぐらい、まなかちゃんが自分で判断してよ。まなかちゃんが怪しいと思ったらサクツと殺しちゃえばいいのよ」

「うん。判った」

まなかは返事をしたあと、目を伏せた。そのつらそうにするフリに美月は不快感を感じるが、それを言動で示すことはしない。

「あれらはすべてオスでございますよね」

白衣の女が美月に尋ねる。

「たぶんね」

「でしたら、殺す前に楽しんででもよろしいでしょうか」

「根凌、あんたねえ。あんな子供にまで手を出すつもりなの」

「あれは子供でございますか。美月様はあの種属の成体と幼体の違いをご存知なのでございますか」

「見るからに子供じゃない」

「トイブードルは成体も小さくて可愛らしゅうございますが、生まれて二年もすれば生殖可能でございます」

「聞いてみる。ついてきて」

美月は向き直り、まなかと根凌を連れてホビットたちの元へと戻ってくる。

「真嶋まなかと根凌オブ。この二人がここで小さいのの相手をするから」

「まなかだよ」

「根凌でございます」

美月の紹介に合わせて、まなかは作り笑顔で手を振り、根凌は深々と辞儀をした。

「これでいいでしょ。さ、行くよ」

「ハ。ハイ」

「で、その前に聞きたいんだけど、あななたちってまだ子供だよ」

「え。ハ。ハイ」

「それとも、大人になりかけの子供だったりするのかな」

「いえ。庄ではまだ半人前の扱いさえもしてもらえませんでした」

「そう、ありがと。根凌、そういうことだって」

「それは残念でございます。その節はサクツといたします」

根凌は表情を一切変えずに真顔で答えた。

「じゃあ、ワズ・バーン、シャバラに乗って。谷まで急ぐよ」

ワズは周りを見回し、シャバラを探す。シャバラがどんなものか知らないが、乗れと言うからには、騎乗できるものだろう。そうだとすると、シャバラはあの大きな茶斑の犬だ。ワズは犬を見る。そして、その牙を見て一瞬ひるんでしまう。

「大丈夫、シャバラはむやみとかみついたりしないから」

そう言われたワズはこわごわとシャバラに近づく。

「垂人の仔よ。おびえるな。我の背にまたがり、首輪をしっかりと掴んでおけ」

茶斑犬が唸るような低い声でホビットの少年に話しかける。

「ハ。ハイ」

ワズはシャバラの背に手をかけ、そして、残る二人のホビットを見る。

「フルド、ミルド。ここで待ってて。僕はこの人たちとホザグルを助けに行ってくる」

小さな二人のホビットは不安げにしながらも、気丈にうなづく。

「マナカさん、インリンさん。二人をよろしく願います」

ワズはまなかと根凌に向かって頭を下げる。まなかはミルドと手をつなぎ、ワズに向かって手を振る。根凌は軽く頭を下げ、ちらっと美月の様子を

うかがう。それに対して美月は苦笑いを返した。

ワズがしがみつくようにシャバラに乗ったのを確認すると、美月は進軍を宣言した。

「洞窟へ急ぐよ。総員、駆け足」

茶斑の犬はものすごい速さで走っている。背にのるワズの方向指示が追いつかないときがあるほどだ。疾走と言っていいほどの速さで、森の木々を器用に避け突き進んでいる。狼の毛皮を着た浅黒い人も、白熊の女神様も、茶斑の犬に遅れずついてきている。そのうしろにも、何人かいるようだが、そこまで振り返ると振り落とされそうでワズは確認できない。

森を走り抜け、人ひとりがやっと通れるような幅の崖の中腹の小道を速度を落とさず走り切る。

見覚えがある谷が見えてくるまで、あっという間だった。助けを求めて走り出した往路の時間と、この不思議な集団に出会ってから、ここに戻ってくるまでの復路の時間を比べると、帰りは行きの半分もかかっていないだろう。

ここを出たときもワズは必死になって全力で走った。帰りは、いくら大人たちだからといってもこんなに早く戻ってこれるとはワズ自身思っていなかった。

これならば本当にホザグルを助けられるかもしれない。

正直なところ、洞窟から狼が出てきてホザグルを睨みつけたときから、ワ

ズはホザグルを助け出すことができるとは思っていなかった。大声で叫びながら、狼に向かって届かない石を投げはしても、崖とも云える身の丈の五倍以上の急斜面を、自らが下りようとは決してしなかった。

ホザグルに向かって、河原に立っている一本細い枯れ木に登るように指示し、「助けを呼んでくる」と叫んだのも、ホザグルが狼に食べられるところを見たくなかったからにすぎない。

ワズ、ホザグル、フルド、ミルドの四人で村を出て、雪山に登り、下りてくるまで四日。その間、誰にも会わなかった。標高がだいぶ下がったのか、昨日からは雪はほとんどなくなったが、街道があらわれる気配もなく、まだまだ山奥だ。こんなところに人がいるはずがない。助けを求めて山を下っても、間に合う範囲に求める人はいないだろう。

ではなぜ自分は走るのか。それは助けを求めるのではなく、ホザグルの死から少しでも離れたいからではないのか。

だから、目的地の谷が見えてきた今でも、変わり果てたホザグルの姿が見えるのではないかと、目をそらしてしまっているほどだ。

「ギャー」

前方から大きな悲鳴が聞こえる。間違いない、ホザグルの声だ。おそらくホザグルが狼に襲われているのだ。ワズは心配が押し寄せると同時に安心を感じた。少なくとも、現時点では友はまだ骸《むくろ》になっていないのだから。

ホザグルの声を聞いて、シャバラはさらにスピードを上げた。まるで、飛

んでいるような速さだ。ワズは前を見ることさえできない。全身を茶斑犬に押し当てて、しっかりと首輪をつかんでいなければ振り落とされてしまう。

周りは見えないながらも、ワズは前後動、上下動を感じていた。そして、突然の浮遊感。そのあとドシンという衝撃。衝撃の後には二三歩の歩みがあり、犬の動きが止まった。

ワズはゆっくりと目を開ける。そこはすでにホザグルが落ちていた谷川の河原だった。

後ろを振り返ると、急な崖を跳びおりている白熊と狼がいる。そして、鳥人と場違いな派手な服を着た少女が飛ぶようにおりてくるのが見える。

「グギャ」

今度は短い悲鳴だ。見ると、ホザグルが両手を二匹の狼にかみつかれて状態で、洞窟に向かって引きずられているところだった。

ワズより体も大きく、力もあるホザグルでさえ、両方の手を掴まえられては、身の自由は効かないようだ。

「ホザグル！」

ワズの叫び声にホザグルの左手をくわえていた狼が、首をワズに向ける。そのとき、狼の口から血があふれだし、「ギャー」というホザグルの一層大きい叫び声が谷に響く。

狼が首を動かしたことにより、ホザグルの指か手首がちぎれてしまったのだ。

狼は口から血と何かを吐き出す。吐き出したものの大きさからして、かみ

ちぎられたのは手首ではなく、指だろう。

「ホザグルー！」

ワズは再び叫ぶ。その声に反応してシャバラは狼に向かって走り出す。指を吐き出した狼は、あばれるホザグルの左手をかみなおすと、洞窟の中に消えていった。

「グッド・タイミング。グッド・シチュエーション」

美月は心の中でつぶやいた。悲鳴が聞こえ、慌てて谷に降りた。そこで見たのは子供のホビットを洞窟に引きずり込む狼たちの姿だった。そのあまりの都合の良さに、美月はほくそ笑んでしまった。

美月たちの当初の目的は洞窟探検だ。洞窟内にモンスター種と獣が巢食っているのは事前の探知で知っていた。それらを狩りながら洞窟内を調査するのが本来の目的だった。

その途中で三人のホビットと出会い、その中の一人を連れてここまで来たのだ。だが、ここで救助を待つホビットを助け出してしまったら、洞窟に入る名目が失われてしまう。もし、そうなったとしても『このような危険は放置できない』などの理屈をこねて狩りを行っただろうが、説得力は減少しただろう。

ところが現実には狼たちはホビットを生かしたまま洞窟に連れ込んだ。助けるために洞窟に入る。そして、襲ってくる獣やモンスターを退治する。それはまったくもって自然な行動だ。

美月はシャバラを追い越し、洞窟の前に立つ。そして、なぜか中に飛び込もうとするシャバラを手で制止した。入り口付近で助け出してしまったら、そこで狩りは終わってしまう。それはもったいない。

「待って」

「急いで助けに行かないと」

「黙って」

抗議するワズに向かって、美月は人差し指を唇に押し当ててみせる。そして、耳をすました。

「生きたまま中に連れ込んだってことは、すぐに殺す気はないってこと、生かしておかなければいけない理由があるってことよ。それより……」

美月が話の途中で急に黙り込む。

「うう、わん」と狼の吠える声がし、それと同時に「キーキー」と高い音が洞窟内に響き渡った。

「来るよ、バット系。数、十……、ちがう。小型バット十二以上、ジャイアントバット系、五」

美月はいってきた戦闘組の顔を順番に見ていく。

「シャバラとひとみは後方。ワズ・バーンを護って。ロブ羅斯とヘルムヴィーグには外に出てきたのを任せた。私と美雪は入口で迎え討つよ」

美雪は美月が言い終わる前から、洞窟へ急いだ。そして、走りながら腕をクロスさせ、左右の腰につりさげたアーミーナイフを同時に鞘から引き抜いた。

「緊張しすぎたよ、美月。いつも通りでね」

追い抜きざま、そういうと、外の陽が届くギリギリまで進み、出口をふさぐように立ち止まる。

「気を抜かないで、いつもとは違うんだから」

美月は美雪の背中に叫ぶ。声をかけながらも背負ったずた袋からアイアンクローを取り出し、素早く両手の箆手に装着した。

美雪は両腕を上にあげ身構える。その姿は白熊の毛皮も相まって、まるで襲い掛かろうとしているクマに見える。

美月は美雪の背後で、腕を横に広げ腰を低くした。

「ちょっと待ってよ」

「それは敵に言って」

谷川はさほど大きくない。山間の沢といった呈で、片側は高さが美月の背の二倍よりやや高い急斜面となっている。そして、そちら側が今来た山道につながっていた。

川の幅は短いところでは小柄なホビットでも簡単に飛びこせる程だ。一番長いところでも、その倍ぐらいいかない。川の流れは多少の速さがあるものの、川底も見えている。川の中には大きな石も飛び石のようにあり、飛び越せなかったとしても、問題なく歩いて渡れるだろう。

対岸は少し開けた河原になっている。そこには大きめの石や砂利が敷き詰められている。そして、河原には一本の枯れ木が立っていた。それがホザ

グルが避難していた木だ。

河原の先にはそびえたつ岩壁が続いている。それは見上げるほど高く、ほぼ垂直に立っていて、素手で登ることは不可能だろう。

洞窟はその岩壁にあった。開口部を下流にむけている。間口は高さと同様に美月の背丈の二倍ほどだ。河原からはゆるやかな登りとなったところであり、口の左に入口を四分の一ほどをふさぐような大岩が転がっている。さらにその岩の前にそれよりはいくぶん小ぶりの岩があった。

入口は漏斗を横にしたような形になっていて、先に行くほど小さくなっている。漏斗が終わったところが陽が差すギリギリのところで、それより先はよく見えない。

その大きさは開口部の半分ほどで、そのサイズのまま奥深くまで続いているようだ。

漏斗の先で美雪と美月が立ち、奥を見据えていた。鳥人ロブローは左の岩の上に飛び上がり、女騎士のヘルムヴィーゲは開口部の右寄りに立つ。魔法少女は洞窟から離れた河原に立ち、茶斑犬はワズを乗せたままその背後に移動した。

「亜人の仔よ、降りて、そこで小さくなっているがよい」

「ハ。ハイ」

シャバラが低く吠えると、ワズは犬の背から転げるように降りる。そして、言われたとおりに背を低くして下を向く。そのとき、前に立つ少女の足元に血まみれの指が落ちているのを見つけた。狼が指を吐き捨てたのはこ

のあたりだ。ワズは背をかがめたままホザグルの指を拾った。

「スカートの中、覗かないでネ」

上からの声にワズが頭を上げそちらを見る。と、そこには魔法少女の短いフリルスカートとその中の水玉の布、そして見下ろしているひとみの顔があった。

「飛田ひとみよ。我は見ていた。その仔は覗いていたのではない。友の指を拾っていたのだ」

「そうなの。パンツを見た訳じゃないのネ。疑ってごめんネ」

ひとみはワズに照れたような笑顔を見せる。

「ご、ごめんなさい。見えてしまいました。で、でも、わざと見たんじゃないんです。見えてしまったんです」

「わざとじゃないならしょうがないネ。でも、これからは絶対に見ないでネ」

真っ赤な顔をして謝るワズに対して、ひとみはもう一度笑顔を見せる。だが、今度の笑顔には幾分冷たさが混じっているように見えた。

「もしわざと覗いたら、ハイフン九で殺しちゃうヨ」

「キー」という高い音がする。それと同時に美雪が半歩前に進み、左腕を振り下ろす。今度は「キッ」という短い音とバタバタと羽根が空を切る音がする。

下ろされた左手はそのまま背中の方まで振られる。すると、美雪の背後に

いた美月の目の前に片翼を失った蝙蝠が叩きつけられた。

それを確認した美月が素早く左の鉄の鉤爪で胴を串刺しにする。そして、眼帯に覆われた左目の前に持つてくると一瞥をくれる。

「バット！ 野生種。毒なし！」

そう叫ぶと同時に、残った右の翼をを右手でつかむ。そして、両腕を左右に広げる格好で蝙蝠を引き裂く。三本の爪に串刺しにされた蝙蝠はいびつに四枚におろされていく。

美月が叫んでいる間も、美雪はナイフを振り続けていた。淀みのないその動きはまるでストリートダンスを踊っているように見える。美雪は華麗に舞い蝙蝠を切り付け叩き落していく。美月は美雪の背後で地に落ちた蝙蝠にとどめを刺していく。

「ジャイアントっ」

急に美雪が叫び、体をひねる。その隙間から見たのは子犬ほどの大きさの蝙蝠だ。両翼を目いっぱい広げれば美月の背丈にも匹敵するだろう程の大きさがある。

大型の蝙蝠は美雪の脇をすり抜けて洞窟の外に出てきた。美雪も振り返ってナイフで切ろうとするが、それをスルツと躲してしまう。美雪の攻撃を逃れ、さらに美月の横もすぎようとしている蝙蝠に向かって、美月は一瞬背を締め、ジャンプでとびかかる。

白熊の毛皮の美雪が熊に見えるように、狼の毛皮の美月はまるで狼そのものだ。

とびかかった美月の爪を避けきれず、左右の翼を傷つけられた蝙蝠は地に落ちる。翼を使えず飛べない蝙蝠は大きな体を引きずりながらヨタヨタと歩いて逃げ出そうとした。美月は四つ足でジャンプすると、キーキーと鳴きながら逃げようとしているものを足で踏み押さえる。そして、じっと凝視した。

「ジャイアントバット。風系のソニック使い。麻痺毒！ 一位のモンスター種！」

「毒はどこっ」

美雪の問いに美月は踏みつけている蝙蝠をもう一度見る。

「牙のみ！ それ以外には毒なし」

その返答と同時に美月は足に体重をかけ、蝙蝠を踏みつぶす。ジャイアントバットは血と内臓と肉を巻き散らかしてペシャンコになった。

「ロブローサーたちにもまわしてあげて」

美月の声に、カンカンと音を立て、二匹のジャイアントバットと打ち合っていた美雪が二三歩後ずさる。洞窟をふさいでいた美雪がどいたのをチャンスと見たのか、小柄なバット数匹とジャイアントバット一匹が外へと飛び出してくる。さらに、美雪が相手をしていた二匹のうちの二匹を、美月が素手で捕らえ、ヘルムヴィーゲに向かって投げつけた。

ヘルムヴィーゲは構えていた盾でジャイアントバットを叩き落とすと、地に落ちた蝙蝠を盾で押しつぶす。その一方でロブローサーは岩の上から飛び上がると、壁や天井を走り回りバットを斃していた。

ナイフで戦う美雪。鉄爪で切り裂く美月。盾で押しつぶすヘルムヴィーゲ。重力を無視して、壁や天井に『立つ』ロブローサー。

彼らによって蝙蝠たちは次々と討ち取られていく。その様子は、まるで蛮族による大量殺戮だ。

死んでいくバットの血や脳漿によって四人の蛮族は瞬く間に薄汚れていく。だが、誰もそんなことは気にしない。

四人のダンスが終わると、入口は蝙蝠の死骸で埋めつくされていた。

「まだ奥にいるけど、先に進むよ」

一段落したところで、耳をすましていた美月が、進軍を宣言した。

あつという間にすごい数のバットと五匹のジャイアントバットを斃してしまった四人にワズは驚いていた。目を瞠《みは》るとはまさにこのことだろう。口と目を開き、啞然としている。

ホビットは森で暮らす種属だ。暮らしの中で獣を見かけるのは日常茶飯事だ。モンスター種と出くわすことも多い。だから、それらの対処法は確立している。だが、だからといってモンスター退治が簡単という訳ではない。モンスター種と亜人種はテリトリーを分けて生活している。よほどのことがない限り互いのテリトリーは侵さない。領域侵犯は戦いを生み、それはどちらにとっても不利益としかならないからだ。

極端な食糧難などで、モンスター種が集落の近くまでやってきて、放牧された家畜を襲うことはある。その行動が十日に一度で、群れの中から一匹だ

けを狙うのであれば、ホビットは何もしない。逆に、テリトリーの境に、家畜の鳥を吊るしておくことさえする。

だが、敵の要求がそれ以上であったり、無差別に集落に襲いかかるなどしたときは、モンスター種と戦うことになる。

そのときの準備は念入りに行われる。何日もかけていくつもの罠を用意し、それらをモンスター種の通り道に仕掛ける。そして、若者たちと、集落にあるすべての剣や槍、弓が集められる。

相手がジャイアントバット一匹でも、相手をするのはホビットの頑強な若者が十人以上となるのだ。

それでも、怪我人が何人か、運が悪いと死者まで出てしまう。それなのにこのグループは準備もなく洞窟に入り、一瞬のうちにジャイアントバットを五匹も退治してしまったのだ。それはワズの今までの経験からは考えられないことだった。

人間の都市にはモンスター退治を生業にする者たちがいるという。彼らはその冒険者なのだろうか。ワズも行商人とともに集落に來た冒険者を見たことがある。確かに美月らとその冒険者は、醸し出す雰囲気似ていた。

だが、モンスター退治を職業とする冒険者なら野生のバットに毒がないことや、モンスターのジャイアントバットは牙に毒を持つことぐらい知っているだろう。その程度のことにはワズでさえ知っている話だ。戦闘中にわざわざ大声で伝える内容ではない。

「亜人の仔よ、立て。先に進むぞ」

シャバラに促されたワズは立ち上がる。美月と美雪、そしてロブプロス—はすでに中に入りかけている。

「シャバラは美月様の後ろで、ワズ・バーンはそれに続いてください」

女騎士がシャバラとワズに先に洞窟に入るように指示を出す。

「私は飛田ひとみの後から参ります」

「待つて。なんでモンスターをこのまま放っておくの」

ワズがジャイアントバットの死骸を見て進軍に待ったをかける。

「何故とはどういうことでしょうか」

「なんでモンスターの落としたアイテムを回収しないの？ 復活しちゃうよ」

「それはどういうことでしょうか」

ヘルムヴィーゲは首をかしげる。そこへ後続がないことを不審に思った

美月が、確認に戻ってきた。

「何してんの。早くいかないと助けられるもんも助けられないよ」

「ワズ・バーンがジャイアントバットのドロップ品を回収したいと申しているのです」

「はあ？ ドロップ品と友達の命とどっちが大事なの」

「だって、このままだとモンスターが復活しちゃうから」

美月とワズはお互い相手を信じられないという顔で見つめあった。

美月からすれば雑魚モンスターのドロップ品などに価値を見出せない。

そんなごみクズよりホザグルのことが重要だ。そもそもワズは仲間を助け

にここに来たのではないか。

一方、ワズはモンスター召喚アイテムをこのままにしていくなか、美月たちが理解できないでいた。モンスターがいるということはこの洞窟にはスライムがいるはずだ。今はこれだけの人がここにいるから臆病者のスライムが姿を現すことはないだろうが、全員が洞窟の中に入れば、すかさず地中から身を表し、アイテムを飲み込んでホットスポットに向かうだろう。そうなれば、奥にいるモンスターと復活したモンスターとで挟み撃ちにあってしまう。アイテムを拾うだけでそれが回避できるなら総合的に見てそちらのほうがいいに決まっている。

先に目をそらしたのは美月だった。蝙蝠の死骸を見た後、ヘルムヴィーゲに目を移した。

「拾って」

女騎士にそう告げ、洞窟に向かって叫んだ。

「美雪、ロブロス。戻って。ドロップ品、回収するよ」

そして洞窟から足音が近づくのを確認すると、足元のジャイアントバットをまさぐり、すぐさま二本の牙と長く伸びた爪を引き抜いた。

「ワズ・バーンもぼーっとしてないで、手伝ってよ。このくらい時間がたつてれば、ワズ・バーンでも拾えるでしょ」

口の奥から毒袋を取り分ける美月のあまりの解体の手際よさに見とれていたワズが我に返る。確かに手伝えばそれだけ早く先に進める。ワズもポケットに入れた小型ナイフを取り出し、蝙蝠の解体を始めた。

洞窟は暗い。その中を一団は黙って進んでいた。彼らの足音のほかに聞こえるのは遠くで吠える狼の声と、時折聞こえるホザグルの短い悲鳴。そして、がさがさとはばたく羽音だ。

洞窟は広くなったり狭くなったりしながら上へ上へと続いている。

ワズは常に右手は岩壁を触れながら、前を歩くシャバラと美月の足音を頼りに進んでいた。それでも、暗くて足元が見えないため、しょっちゅう石や岩に足を取られてしまう。

入口以降は蝙蝠に集団で襲われることはなかった。それでも、単発に頭の上を飛び回るものもあったが、それも先頭的美雪か次の鳥人によって退治されていた。

「キキ」

前衛が打ち漏らしたのか、それとも先頭が行き過ぎるのを待って天井から落ちてきたのか。一匹の蝙蝠がワズの頭の上を通り過ぎた。

「うわっ」

ワズは思わずしゃがみ込んでしまった。すると、唸る声がしてワズの頭の上を風が横切る。グギッという音がして、羽音がやみ、生暖かいものがワズの頬を濡らす。

茶斑犬が蝙蝠をかみ殺したのだろう。その後、暗闇の中で何かを叩きつける音と、石をひっかく音がする。どうやら、シャバラが前足で器用に牙を回収しているらしい。

「仔よ、立て。進むぞ」

いつまでもしゃがんでいるワズに、シャバラが声をかける。ワズは壁につまり立とうとするが、腕を伸ばしても壁にたどりつかない。

「あ。あの。灯りつけちゃだめですか」

「小休止して。お願い」

ワズの背後でひとみが進軍休止を伝える。その声でピタッと足音がやむ。

「トラブル？」

前方から美月の声が聞こえる。

「ワズ・バーンが暗すぎて目が見えないんだって」

「ごめんごめん。私たちはこのくらいの暗さなら慣れてるから気付なかったよ。目が見えないんじゃないかな。外で待ってる？」

美月はそう言いながらワズのところへ戻ってきた。

「い。いえ。灯りをつけさせてもらえれば大丈夫です」

「灯りかあ。ランタンあったけなあ」

「あ。僕、火魔法が使えるので、ファイアランプ出せます」

ワズがそう答えると、周りが一瞬驚きに包まれた。何かまずいことを言ってしまったかと心配し始めたとき、美月が今までの口調に戻って尋ねた。

「そうなんだ。ワズ・バーンは魔法使えるんだ。ファイアランプってのは灯りの魔法なの？　出してみてよ」

美月は平静を装っているようだが、何かが違う。どこか探るような感じを漂わせている。そもそも、ワズは最初からワズ・バーンを名乗っていた。で

あれば、魔法が使えることは自明のはずだ。とすると、驚きは火の魔法だろうか。確かにホビットで火魔法を使えるのは珍しい。だが、それほど驚く話でもないだろう。

ファイアランプのような初級の魔法さえ知らないとなると、山のこちら側では火魔法はものすごく珍しいのかもしれない。そんなことを考えながら、ワズは呪文を唱えた。

ワズの呼び出した火は小さなものだった。それは大きめの蝋燭の炎に似ていた。その火をナイフの先に灯し円を描くように回してみせる。すると、描いた円が薄ぼんやりと赤く輝きだした。その輝きはほのかに周りを照らし出す。

照らすと言っても、かすかに周りが見える程度だが、今までの暗さと比べると、十分な明るさだろう。

その灯りを見て美月がいきなり笑いだす。

「そうなんだ。これが火魔法のランプなんだね。いやあ、すごいね。すごいよ、ワズ・バーン」

薄ぼんやりとした中で笑う狼は、逆に恐ろしさを醸し出していた。

昼夜を問わず日がささない洞窟の中で暮らすものにとっては弱い光でも警戒のもとになるのだろうか。ワズがランプを出してから蝙蝠の攻撃は一度もなかった。キーキーと鳴く声や羽音はするのだが、灯りに照らされる

と、みな、岩陰に入り込んでしまうのだ。

いくぶん足元が見やすくなった一団はワズの頭上の灯りとともに黙々と、いくつめかの曲がり角を曲がったとき、前方に明るくなっているところがあらわれた。どうやら、もう一つ曲がった先で天井に穴があり、日の光が差し込んでいるようだ。

先頭的美雪はそれを見て立ち止まった。美月はその美雪とロブ羅斯ーに對し、先行して様子をうかがうようハンドサインを出す。それに応えて美雪と鳥人が忍び足で先に進み、様子をうかがいながら角を曲がる。鳥の鳴き声、キーキーという蝙蝠の声。遠くで吠える狼の鳴き声。

「オールクリア」

曲がり角の先から美雪が姿をあらわしそう告げる。美月はうなづくとその場で待機していた残りのメンバーに移動を促した。

そこはかなり開けた空間だった。高さは今までの三倍以上、横幅も相当ある。小さなホールといった場所だ。そのホールの天井には裂け目のように細長く亀裂が入っていて、そこから陽の光がさしている。

壁際には小さな沢があるからだろうか、陽の光が直接当たるところには、暗い洞窟の通路にはなかった草や低木も生い茂っていた。多くの虫や小さな鳥が飛んでいる。蝙蝠は日の当たらない天井の隅でじっとぶら下がっていた。

あいた穴から見える空を見上げていた美月に向かって、美雪が広間の中央を指さす。指さす岩の陰には押しつぶされたように壊れた荷車の残骸が転がっていた。

美月はその荷車に近づいた。その周囲には人間種と思われる頭蓋骨と骨盤、そして馬と思しき骨が散らかっている。

荷車の上空を見ると、天井の割れ目にこすれたような跡がある。そして、車輪の一つが裂け目の飛び出した岩に引っかかっていた。

「荷車だね。上から落ちたかな」

「荷車じゃなくて荷馬車でしょ。馬がいたみたいだから」

美月の発言をすかさず美雪が訂正する。

「どっちだっていいじゃない」

美月は折れた荷馬車の車軸を凝視した。

「ここ二三日って感じじゃないね。落ちたの。でも、何年も前ってこともなさそう」

「二三日じゃないことくらい私にも判るよ」

美雪はそういいながらひっくり返った荷台のへりに手をかける。

「ここまで白骨化するには二三日じゃ無理でしょ」

それを掛け声として、荷台を持ち上げ上向きになるように転がした。すると、荷台の下に隠れていた手のひらほどの蜘蛛のような黒い虫が岩の下に潜り込むように蠢き、数匹の羽虫が飛んで逃げていく。

小指ほどの大きさの羽虫にとびかかられたひとみはしきりに顔をぬぐった。

ている。

荷物は少なかったのだろうか。それとも、食物系がほとんどで、すでに虫や獣に食べられてしまったのか。荷台の隙間に小さなナイフが一本挟まっていた以外は、周りや台の下にこれといったものは発見できなかった。

「あ。行商人さんの荷馬車だ」

いつの間にか美雪の後ろに来ていたワズつぶやく。

「知っている車なの」

「はい。毎年、秋になると僕らのホビット庄にくる行商人さんのマークです」

美雪の問いに指をさしたワズの指先には、吊り下げ天秤をデザイン化したエンブレムが見て取れた。

「前回の秋はこなかったんです。だから、冬の食糧が足りなくてだから、だから僕たちが……」

「面白そうな話だね。聞かせてくれない」

下を向いて言葉を詰まらせたワズに対し、美月が口角を上げながらニタリと笑う。ワズがこぶしを握り締めたとき。

「ギャア」

遠くでホザグルの叫び声が聞こえた。すでに先の細い通路に入っているのだろう、悲鳴にはエコーがかかっている。

美月と美雪、そしてワズが声のした方向を見る。美月はびくつとして耳をすませた。

「今はそんな話するときじゃないね」

彼らの視線の先には横穴が二つあいていた。

「さて、手前と奥、どっちだろうね」

美月がワズを見る。ワズは答えに詰まってしまふ。

「ヘルムヴィーゲ、ひとみちゃん、ロブロースーは奥に行つて。シャバラと美雪と私はワズ・バーンと一緒に手前側に入るから」

「うん。判ったヨ」

「承知いたしました」

ひとみとヘルムヴィーゲがすぐさま返事を返し、ロブロースーは大きくうなづく。美月はじつとロブロースーとヘルムヴィーゲを見つめ、ニコツと笑った。

「二手に分かれて、その後の集合場所はどこ」

先に進もうとする三人を見て、美雪が尋ねる。

「だからあ。今、言ったじゃない。合流地点だって」

そう即答する美月に対し、美雪が微笑んで見せる。

「美月はそんなこと一言も『言つて』ないよ」

美月は一瞬、あつという顔をするが、その顔がすぐに苦笑いに変わる。

「ええと。なんか、あの穴、ずっと先でつながってる気がするんだよね。だから集合場所はそのぶつかったところで」

その言葉に美雪は笑顔を返し、シャバラは鼻で嗤う。

「諸々承知いたしました」

奥の通路組はヘルムヴィーゲが代表してそう答えると、ロブローとひとみを引き連れ奥の洞窟へ消えていった。

「こっちも急いでホザグルのあと追うよ。先頭は美雪。次、私。ワズ・バーンは私の後ろ。しんがりはシャバラね。ワズ・バーンが遅れるようだったら、状況に応じて背負って」

「遅れないように頑張ります」

美雪も美月もワズの言葉を待たず、先に進みだしていた。

ホールから先はとどころに明かり窓のような隙間が天井にあいていた。そのため、洞窟も暗いながらも足元は見える。ワズの歩みも暗闇の時とは異なりもたつくことはない。

襲いかかってくるものも、明るさのせいか蝙蝠ではなく、狼やダイアウルフ系のモンスター、そして巨大蜘蛛となっていた。

先頭を歩く美雪はそれらを難なく斃していく。そして素早くアイテムを抜き取る。人の頭ほどの巨大な蜘蛛はスルーし美月に処理を任せることはある。だが、それより大型の狼やウルフはいっぺんに複数襲ってきたとしても、美雪のナイフが討ち漏らすことはなかった。

明らかに難易度の高いウルフを討ち取り、蜘蛛を討ち漏らす。討ち漏らした蜘蛛も美月によって踏みつぶされるためワズのところまでたどり着くことはないが、それでも美雪の行動は不自然だ。

ホビット庄は森の中にある。森には虫が多い。多くのホビットは虫を何と

も思わないが、中には極端に虫を嫌う者もいる。美雪も蜘蛛が苦手なのだろうか。

「ミユキはスパイダーが怖いのですか」

敵の攻撃が一段落したときワズが前を歩く美月に尋ねた。

「そんなことないよ。なんでそう思ったの」

「スパイダーに限って、パスしているの」

「パス？ ああ、なるほどね。蜘蛛をパスしてるんじゃないくて、狼をパスしてないだけ」

「はい？」

「ほら、私は狼でしょ。見方によっては同族になるじゃない。同族を殺すのってやっぱり気持ちいいもんじゃないでしょ」

「ミズキは狼なのですか」

「私は狼で、美雪は熊《ひぐま》だよ。見て判んない？」

「羽織っているローブはそうですけど。中身は人に見えます」

「そっか。人に見えるか」

そう言って美月は笑った。ワズは今の何がおかしいのか判らず首をかしげる。彼らは規格外だ。面白さの基準もワズとは大きく異なるのだろう。であれば、いくら考えて何が面白いのかは判らない。ワズは話を元に戻した。「ええと、ウルフをパスしない理由は判りました。じゃあ、スパイダーをパスするのはなぜですか」

「私だってちょっとは戦いたいじゃん。あ、ワズ・バーンも戦いたかったの

か。気が付かなかったよ。ごめんごめん」

「い。いえ。そういう訳では」

「ワズ・バーンは魔法使いだったもんね。次の蜘蛛はワズ・バーンに任せるよ。それとも蜘蛛じゃなくて狼のいい？」

「無理です！」

美月は、守られてばかりのワズに対し、嫌味を言っているのだろうか。ワズの魔法でウルフを斃すのは無理だ。ファイアボールは使えるが、その威力は大したことない。せいぜいぶつけられた相手がびっくりする程度だろう。

「なんで無理とかいうの。火魔法使えるでしょ。とりあえず蜘蛛まわすから火魔法でやつつけてよ」

「無理です。僕の魔法はそんなに威力ないです」

「ま、私もフォローするから大丈夫だよ」

美月はさらに「大丈夫、大丈夫」と繰り返して、笑って見せる。だが、ワズは気楽には考えられない。規格外の彼女らの基準で話さないでほしい。できることなら、もう蜘蛛には出てこないでもらいたい。そう思いながら足を進めていた。

美月の鉤爪が岩を叩いたようだ。カチツという金属と岩がぶつかる音がある。

「ワズ・バーン。一匹行っちゃよ」

音の直後、美月が振り返りワズに声をかける。ワズが足元を見ると、三本の左脚をすべて切り落とされた蜘蛛が残った右脚とあごの下の中脚を使って、ヨタヨタと歩いているところだった。

美月はワズを見てニタニタしている。一方、ワズは緊張の面持ちで採取ナイフを手にし、手を前に伸ばす。そして火の玉をイメージした。

ボツという小さな音がして、ナイフを握っている拳が赤く照らし出される。わずがあらわれた火の玉から蜘蛛に目を移すと、燃える玉はそれにあわせるようにフラフラと蜘蛛に向かって移動した。

蜘蛛は火から逃げようとするが、片側の脚をすべて失っているためバランスが取れずうまく動けないでいる。

ジュツ。パチパチ。毛の焼けるいやな匂いがする。蜘蛛の毛深い腹にぶつかった火の玉は、体毛に燃え移り全身に広がっていった。蜘蛛は火を消そうとのたうち回るが、全身にまわった火はどうあがいたところで消えることはなかった。

やがて、蜘蛛は残った四本の脚を痙攣させた後、動かなくなった。

「無理だなんて嘘言っちゃって。ちゃんと戦えるじゃない」

「嘘じゃないです。戦ったのは初めてです」

「初めてかどうかは知らないよ。戦えて斃したんだから無理じゃなかったってことでしょ。これからは、私やシャバラが討ち漏らしたやつはワズ・バーンが相手してね」

「そ。そんなことできないです」

「ま、討ち漏らす気なんかさらさないから、そんなことにはならないと思うけど。ただその心構えだけはしておいて」

「ハ。ハイ。判りました」

ワズは歩きながらじっと採取ナイフを見つめていた。

ドッカン。

大きな音がして地面が揺れる。美月や美雪も壁に手をつけて身を低くする。ワズは四つん這いになって身を伏せていた。シャバラはそんなワズを護るかのようにワズの上に覆いかぶさった。

「落石だね。向こうの組で大規模戦闘でも起きたのかな」

美月はさりと云い放つ。今まで通ってきたところは岩盤はしっかりしているように見えた。それが崩壊するほど戦闘とはどんなものなのか。そんな戦闘があつて、なぜそんなに平然としていられるのか。ワズには疑問しかない。

轟音のエコーが消えると、奥からキャンキャン、キツキツと吠える複数の鳴き声が聞こえてきた。狼たちもパニックになっているようだ。

「敵も混乱してるみたいだね。今がチャンスだから急ぐよ」

美月の掛け声に四人は足を速めた。

獣は轟音におびえたのか、以降は攻撃も少なくなった。ときおりウルフは襲ってくるが蜘蛛や蝙蝠は暗闇に隠れたままなのか姿もあらわさない。特に蜘蛛の攻撃がないことにワズはほっとしていた。

と、いきなり先頭的美雪がバックステップで下がってきた。続いてカンと乾いた音がする。

「待ち伏せがいる。下がって」

そう言つて後続を後ろに下がらせ、腕を左右に振る。それに合わせてカンと小さな音がする。

「ちつ。弓を持った小鬼がいるのか。…なるほど、鼠系の獣人だね。ワズ・バーン、ファイアボール連発で牽制して」

「無理です」

美月の要請をワズが即時に拒否する。

「敵は飛び道具持つてるんだよ。私たちは遠距離戦は苦手だから、火魔法飛ばして牽制して。そのくらいできるでしょ」

「僕は一つの火しか出せません。連発はできないんです」

美月の右眉がびくっと上がる。

「そういうことね。一つでも十分だよ。手伝ってくれる？」

ワズは大きくうなづくと採取ナイフ前に突き出す。やがて、ナイフの先に親指ほどの火の玉が浮かびあがり、ナイフをほのかに赤く照らす。

「それをあの穴に打ち込んで」

「どの穴ですか。見えない」

美月は斜め上を指さす。

「通路の右上。あの水がしたたつてるとこのちょっと先。暗くなつてると

「あそこですね。飛ばします」

ワズが言い切る前から、火の玉はユラユラと進み始めていた。その速さは人が歩くのよりやや速いくらいの速度だ。ユラユラとゆっくり動くそれはまるで人魂のように見えた。

それが鼠人にはかえって恐怖の対象に見えるのだろうか。キーキーの鳴き声はやまないが弓による攻撃は一時的に止まった。

「美雪、行くよ」

鼠人の目が火の玉に移ったのを感じた美月が小さくつぶやく。

美雪は黙ってうなづき、美月と同じように頭から毛皮のフードをかぶる。

頭と腕を毛皮で隠し、四つ足で立つ美月と美雪は狼と熊そのものだ。

二人は左右の壁沿いに分かれ、火の玉を挟むようにして走る。火を追い越し、穴の下にたどり着くと美月は手のひらを組み合わせ片膝をついた。手を組み合わせたとき、鉄の爪がこすれあい、シャツと齒の浮く音を発する。美雪はためらわず、美月の手のひらを踏みつけた。そしてジャンプ。それに合わせて、美月は腕を大きく上に振り上げる。

美月の助力もあって、美雪は楽々と穴へと入り込んだ。

キーという悲鳴と金属が肉を斬る音。しばらくそれらが続く。やがて、その音がしなくなると、穴から美雪が半身を出し手を伸ばした。

「まだ奥に何匹かいるから、美月も来て」

美月がその腕をとると、美雪によって穴にひきづりあげられた。

ホビットで魔法が使える者は多くない。多くはないが全くない訳でもない。ワズもワズの母も魔法が使えるワズの住むホビット庄には二人のほかにもう一人魔法が使えるものがある。その彼の使える魔法はワズや母とは異なり水魔法だった。

他の庄も同じくらしい数の魔法が使えるホビットがいるだろう。東の果てのホビット庄は住民も少ないので今は一人もいないという話だが、それでも数年前まではヒール魔法を使える年寄りがいたという。

魔法が使える者が何人かいても、その中に職業としての魔法使いはいない。魔法が使えても、普段はほかのホビットと同じように狩りをし、農作業をして暮らしているのだ。

魔法を頼って人が訪ねてくることがない訳ではないが、そんなことは年に一度あるかないかだ。

ホビットの魔法使いができることはたかが知れている。魔法が使えるなくても、ちょっと苦勞をすれば誰でもできることや魔道具で簡単に代用できることぐらいしかできない。

ワズの使える火魔法は火の玉の出現と、火による灯りぐらいだ。日常生活では火打石とほい口があれば火の玉がなくても用が足りる。灯りはランプで事足りる。どちらもうざわざワズを呼びつけて魔法を使ってもらう必要はない。

魔法は、才能が持ったものが訓練をすればさらにその力を増すという。だ

が、ホビットは持つて生まれた魔法以上のものを求めようとはしなかった。それは代々伝えられる昔話「火と水の魔女」や「ひとりぼっちの魔法使い」の影響もあるだろう。

魔法を極めようとしたがために自滅した魔女や、孤独な死を迎えた魔法使いの話を夜な夜な聞かされれば、誰でも過度な力をつけようとは思わなくなる。

魔法が使えなくても人は普通に暮らせるのだ。魔法ができれば多少の楽はできるが、そんな楽に頼ってしまつては、しっぺ返しが待っているのは世の常だ。

だから、ホビット庄に住むホビットで魔法使いで生計を立てている者はいない。庄を出て街で暮らす外ホビットの中にはそんな者もいるかもしれないが、少なくともワズは魔法を極めようとは思っていないかった。

弱い魔法をたまにしか使わないワズは魔法の力が伸びることはなく、唯一使える火魔法も一つしか出せない。ワズが知っている魔法使いも全員、一つしか使えないため、複数の同時使用を要求されるとは思っていないかった。

美月の口ぶりからすると、外の世界では魔法の複数同時使用が一般的なのだろう。確かにワズがもっと魔法を使えていれば、この洞窟の探検も楽だったはずだ。ここまで進むことなく、もっと手前でホザグルを助け出せていたかもしれない。

そんなことを考えていたワズの前に狼姿の美月がドサツと落ちてくる。「上はあらかた片付いたよ。でも奥にまだ何匹がいるんだよね。通路が狭す

ぎて私たちだと通れないんだけど、どうする。ワズ・バーンが一人で奥に入つて鼠人を斃してくる？」

「ぼ。僕一人で…」

ドカン。ガラガラ。ワズが答えようとしたとき、再び地揺れが起きる。今度はかなり近いところのようだ。

キャンツ。揺れがおさまると今度は狼の鳴き声。これかなり近い。かすかに人が話している声も聞こえる。どうやら別組の女騎士が魔法少女に指示を出しているようだ。

「落石は合流地点かな。近いね。急ぐよ。ワズ・バーン、シャバラに乗つて。美雪、そこは放棄。先行くよ。しんがりを務めて」

後半は穴に向かって叫びながら、美月は言い切る前に走りだしていく。ワズが茶斑犬にまたがると同時にシャバラも地を蹴る。背後でドスツという音がしたが、それは美雪が穴から飛び降りた音だろう。

落石の場所は本当に近かった。走ったかと思う間もなくすぐにたどり着いた。もともと狭くなつていたところに石が崩れ落ちたらしく、通路が半分埋まり一人がやっと通れるくらいの隙間が空いているだけだった。

近づいてみると石の間で一匹の狼が押しつぶされている。どうやらその狼は二回目の落石に巻き込まれたばかりのようで、まだダラダラと血を石に滴らせていた。

すでに絶命しているであろうその狼に向かって美月は鉄の爪を突き刺す。

「もう一匹の狼はどこ。それとホザグルは」

美月は隙間の先に向かって問いかける。

「狼は始末いたしました。ホザグルはこちらで確保しています」

隙間の向こうからヘルムヴィーゲと思われる声がする。

「怪我は」

「傷は多少あります。朦朧としていますが命に別状はありません」

「ひとみちゃんの見立ては？」

美月は崩れて積みあがった石山に登り、隙間の先を見る。

「直せる怪我は直したヨ。狼に引きずられたときに頭を打ったばかり、ポーツとしてるだけだヨ」

「ひとみちゃんがそう言うなら大丈夫だね」

美月はそういうと石山の上からワズに向かって右手を伸ばす。ワズが石山に登るのを手伝うつもりなのだろうが、差し出された手を見てワズは思わず腰が引けてしまう。

尻ごみの原因が血まみれの鉄の爪を目の前に出されたことと悟った美月は「ごめんごめん」と言いながら右手首をくねっと曲げる。するとカシャツという音とともに右の鉤爪が引っ込んだ。それを見た美月が再び右手を伸ばす。今度はワズもためらわず美月の手を取り石山に登ると、隙間の向こうを覗き込んだ。

隙間の先は薄暗い。だが、こちら側よりは幅広の通路になっているようだ。その通路の壁にもたれかかるようにしてホザグルが身を横たえていた。

ひとみの横でこちらを見ている友の顔を見たとき、ワズの瞳に涙が浮かんできた。

「早く近くに行つてあげないさいよ」

珍しく優しい口調の美月に促されて、ワズはホザグルに走り寄った。

「ホザグル。助けに来たよ」

顔の前でワズにそう言われてもホザグルはそちらに目を向けるだけで返事をしない。目の前にいるのがワズだということも認識していないようだ。

「ホザグル！」

ワズが肩を揺すろうとする。横に座っていたひとみが慌ててそれを止める。

「激しく動かしちゃだめだヨ」

そう言つてワズの背後まで来ていた美月を見る。そして美月がかすかにうなずくのを確認すると、ホザグルの顔を覗き込む。

その直後、ホザグルの瞳が光ったように見えたのはワズの気のせいだろうか。

「優しく話しかけてあげてネ」

「ハ。ハイ」

ひとみが顔をどかすと、今度はワズが顔を覗き込む。

「ホザグル」

声をかけられたホザグルの目がワズをとらえる

「あ、あ。ワズか」

「大丈夫か」

「ん。何のこと…。ワズ、後ろつ。危ない。狼だ」

ワズは慌て背後を振り返る。ワズの後ろにいた美月も振り返り狼を探している。その隣でシャバラはフンと鼻で嗤う。ワズが見回しても狼の姿は見えない。

「大丈夫、狼はもういないよ。この人たちが退治してくれたから」

ワズはホザグルに美月とシャバラが見えるようにと身をずらす。それによって巨大犬と頭まで狼の毛皮をかぶった美月の姿があらかになる。

「逃げろ、ワズ！」

ホザグルはそう叫ぶと腰につるした採取ナイフに手をかけた。それを見た茶斑犬がホザグルにとびかかる。そして、のしかかるように両肩を押さえつけた。

「亜人の仔よ。落ち着くのだ。我は狼ではない。犬だ」

身動きを封じられたホザグルは「逃げろ」と叫びながらもがき続ける。

「だから、言ったでしょ。フードは外しなさいって。シャバラもそんな怖い顔しないの」

のんびりとした口調が洞窟の中に響く。白い髪をきらめかせながら美月は美月のフードをはね上げる。暴れていたホザグルの目は美雪にくぎ付けとなった。目を丸くし、いつの間にもがきも止まっている。

美雪はそのままホザグルの前に立つとシャバラをそっと押しのけた。

「私たちはあなたを助けに來たの。安心して」

そう言つて微笑む美雪に向かって、ホザグルは小さくつぶやいた。

「ありがとうございます。女神様」

戻り路にさしたる障害はなかった。行きにあらかた退治しつくしたこともあるのだろう、襲ってくるモンスターもほとんどいない。

ホザグルは念のため茶斑犬の背に乗りひとみに付き添われている。顔がいささか赤みを帯びているのは体調のせいではなく、ずっとホザグルの手を握り、心配そうに見つめているひとみの存在によるものだ。ワズは思っていた。

一行はあつという間にホールまで戻り、そこで美月は小休止を告げた。

ひとみはホザグルを天井の裂け目から漏れる光の下に連れていき、体の隅々まで確認している。ワズも心配そうにそばに寄り、その様子を見ている。

美月と美雪は焚き木を集め石を積み上げて簡易かまどを作っている。そしてどこに持っていたのか飯ごうを二つ取り出し、沢の水を沸かし始めた。

魔法を使ったように湯がすぐに沸く。美月は飯ごうの蓋を取り、粉状になった何かを入れる。二つの飯ごうの両方に茶色の粉を。一方だけにはさらに白い粉を。それからひと煮立ちさせ火からおろす。

全ての動きはなめらかで淀みがない。

「ひとみちゃんカップが飯ごうの蓋、出して」

美月は飯ごうを持ってひとみに近寄ると声をかける。ひとみは背のうを確認し、金属製のマグカップを取り出す。美月はそこに飯ごうの中のベージュ色の液体を入れる。持っていた飯ごうの蓋にもその液体を注ぎ、ホザグルに手渡す。

「飲んで」

「うん」

ホザグルはそう言ったままじっと液体を見ている。

「毒なんか入ってないよ」

美月はそういうと飯ごうに口をつけ一口飲む。

「ちょっと甘かったかな。でも、あなたたちにはこれくらいのがいいですよ」

後半は視線をワズに移しながらそう言うと、口をつけた飯ごうをワズに手渡す。ワズが飯ごうを覗き込むと、かすかに甘い匂いが鼻をくすぐった。

「何ですか、これ」

「ミルクティ」

「ミルク・クティ？」

「知らない？　紅茶にミルクを入れたもの。落ち着くから飲んでみて」

「ハ。ハイ」

ワズが口をつけると甘い匂いが口の中に広がりそれが鼻へと伝わってくる。

「お、おいしいです」

美月はその言葉に微笑むと、もう一つの飯ごうを持って他のメンバーを周っていった。

ワズにとって美月の作ったミルクティは不思議な飲み物だった。美月が言ったように、それを飲むと心が落ち着いていた。ホザグルも大きくフーツと息をもらしている。体中の疲労が和らぐ感じさえもする。

前にワズの母が魔法の食べ物のお話をしてくれたことがある。一流の料理人の作る料理は、味がいいのもさることながら、魔法が込められていて、食べると怪我が治ったり、実力以上のすごい力が出たりするらしい。

美月の作ったミルクティはワズが今まで口にした飲み物の中で群を抜いておいしかった。さらに身体に影響を及ぼす効果もあるようだ。

「おいしかったです。ミヅキは超一流の料理人なのですか」

しばらくして空き容器を取りにきた美月にワズが飯ごうを手渡ししながら尋ねる。

「うれしいこと言ってくれるね。よつ、女殺し」

「母が一流の料理人は魔法の料理を作ることができると言っていたので」

「このミルクティに魔法がかかっていた？」

「僕には判りませんが、心の体も軽くなった気がします。それにとってもおいしかったです。いまま飲んだ飲み物の中で一番のおいしさです」

その言葉に美月が破顔する。目が細くなり口角が上がったその顔は見る人によっては笑顔ではなく恐怖を抱かせる顔に見えるかもしれない。

「そんなこと言ってくれるのワズ・バーンだけだよ。他のみんなはうまくできるときも失敗したときも何も言ってくれないもの。言ったとしても『これは高品質の料理ですね』とか『品質低かったです』とか料理品に対する評価だけ。『おいしかった』なんて誰も言ってくれないよ」

美月の堰を切ったような話し方と、その顔にワズは一步引いてしまふ。

「本当においしかったです。なあ、ホザグル。おいしかったよな、これ」

半ば助けを求めるようにワズがホザグルを巻き込む。ホザグルははじめ何のことも判らなかつたようだが、ワズが示す飯ごうを見て大きくうなづいた。

「おう。ものすごくうまかつたよ。ネクタル、神様の飲み物かと思うくらいうまかつた」

「そこまで言ってくれるなんて感激だよ。よし、洞窟出たらホザグル奪還祝いで、みんなでバーベキューしよ。私が腕によりかけて焼くからさ」

「バーベキューって何ですか」

「キャンプとか河原で肉焼いて食べるんだよ。ほら、洞窟の出口、河原にあったでしょ。あそこでバーベキューしようよ。そうか、バーベキューするんだったらフルドとミルドも呼ばなくっちゃね。ロブ羅斯ー、ヘルムヴィーグ。先行してまなちゃんや向こうに残したホビットたちを洞窟の出口の河原に連れてきてよ。そこでバーベキューするよ」

美月が天井の裂け目を指さすのを見た鳥人は大きくうなづき、女騎士は「承知しました」と言いながら持っていたカップを一振りすると素早くど

こかにしまった。

「では、先にまいります」

ヘルムヴィーグの声に合わせてロブ羅斯ーが背の翼をはためかせ、宙に舞い上がる。ヘルムヴィーグも地を蹴り、ロブ羅斯ーの後を追う。そして二人は裂け目をするりとすり抜け空の上に消えていった。

ワズはその様子を口を開けて見上げていた。

「二人は、空、飛べるんですか」

「ロブ羅斯ーは鳥人だし、ヘルムヴィーグもヴァルキューレだから」

「ヴァルキューレ？」

「ホビットは空飛べないよね」

「ハイ」

「私も飛べないから気にしなくていいよ。そもそも飛べるのが特殊なんだよ。私の周りにはその特殊なのが多いけど、そんな人たちを基準にしちゃダメ。どう転んでもできないことを嘆いたってしょうがないでしょ。そんなことより自分ができることをするのが大事なんじゃない。ワズ・バーンは自分ができることをするために庄を出てきたんでしょ。なら、それをすべく努力すればいいの。自分ではできないことは人に任せちゃえばいいの。今回みたいにね。今回はワズ・バーンたちだけじゃホザグルを助けられなかったよね。だから、助けられる人を探しに行った、ちょうどそこへ私たちが現れた。私たちはホザグルを助けることができる。だから、私たちはできること、すなわちホザグルを助け出すことにしたってだけ。本当の目的は何か。それを

達成するために自分は何ができるか。何ができないか。それをちゃんと考えて、できることを一生懸命する。それが人としてすべきことだよ」

ワズのホビット庄には秋と春に行商人が来ていた。

山の中にある庄は冬の間、雪に閉ざされる。雪の山では獣は冬眠し、姿を現さない。草や木も雪の中に埋もれてしまふ。秋のうちに春までの食糧を確保しておくことが必要になる。秋にくる行商人が持ってくるのは穀物などの保存がきく物と肉などの生鮮品を保存するための護符だ。

その行商人が秋に来なかった。運の悪いことに夏は天候不順で農作物に病気が広がり、収穫量は例年の半分ほどだった。穀物は少なく、肉の保存もできない。冬の中頃には保存食は底をつき、乳を取るための家畜や種もみにも手をさなければ生き残れないようになっていた。

壊れた荷馬車を見るまでは、秋に行商人が来なかった理由は判らなかつた。もし、春にも来なければ庄は耐えきれない。春には必ず来て欲しい。被害を抑えるためにいつもより少しでも早く来てもらいたい。そう伝える必要がある。庄の大人たちが集まった場でその話が出た。

問題はどうかやって伝えるに行くかだった。庄から行商人のいる街には山を越えなければならぬ。冬、山を越えるのは自殺行為だ。山道は険しく普通に通るだけでも一苦労だ。行商人の荷馬車がなぜ山を越えられるのか庄のみんなが不思議に思っているくらいだ。冬はそこに雪が積もり道はほとんどなくなる。

どが道が判らなくなり、道を失い遭難する。狭い崖道がさらに狭くなり滑落する。冬に山を越える者はいない。山を越えなければ行商人に伝えることはできない。

何もせず庄で飢えるか、助けを求め庄を出て山で凍え死ぬか。

大人たちは今後の方針を「隣の庄に食料を分けてもらおう」「冬眠している獣を探し出して狩ろう」と決めた。

隣の庄までは雪道を半日ほど。そこも同じ状況なのは明らかだ。行商人はワズの庄に来てから、隣の庄に行く。十日ほど前、ホザグルが言っていた。隣の庄出身のホザグルの母のところへ、叔父が食料を無心に来たと。

冬眠の穴にしても簡単に見つかるものなら、最初から肉の備蓄など不要だ。さらに、めばしい穴はすでに狩られてしまっている。

大人たちの決定は一切状況改善にならないことは子供でさえ判った。

「フルドとミルドを連れて、山を越さないか」

ホザグルから声をかけられたのはそんなときだった。

「なんでフルドとミルドが一緒なの。あの二人に冬山はつらいよ。行くなら僕たちだけでいいんじゃない」

ホザグルはワズより一つ年上だ。元気な少年といった感じで近い世代のリーダー的存在だった。この冬も日々雪山に入り、雪兎や雪鼠を掴まえては庄のみんなに配分していた。

一方、フルドとミルドの兄弟はまだ幼い。ワズの歳でもない行程に連れ出すのは無理がある。

「俺は庄のみんな。全員を助けたいんだ。それにはフルドとミルドと一緒に
行かなくっちゃいけないんだ。手伝ってくれよ。ワズ」

「大人たちに頼んじゃいけないの」

「大人より俺たちの方がすばしっこいだろう。大人たちには細い道は無理で
も、俺たちならできる。頼むワズ、手伝ってくれ」

ワズは運動神経がいいほうではないが、普通のホビツトだ。冬山が怖くない訳がない。それでもワズはホザグルの言葉にうなづいて
いた。普段は無茶を言わないホザグルが真剣な目でこんな無茶を言うの
だ。そこにはワズには計り知れない理由があつてのことだろう。

ホザグルがワズにその理由を告げたのは、雪山を越えた昨日の晩だった。
フルドとミルドが眠った後、ホザグルが語った話にワズは衝撃を受けた。

庄の大人たちはいざとなったとき、まだ子供のフルドとミルドを殺して、
その肉を食べようとしていたのだ。

ワズの庄ではホビツトが死ぬとその肉の一部を家族や友人が喰らう風習
がある。それは「これからも共にある」との意味を込めて喰らうのだ。ワズ
自身も自分が死んだときは家族やホザグルにその肉を食べてもらいたいと思
っている。死んでも誰にも食べてもらえないようなそんな寂しいことには
なりたくないとさえ思っているのだ。だから、同胞の死体を食べることに
は抵抗はない。

だが、それは持つて生まれた天寿を全うして死んだときの話だ。その肉を

喰らうためにホビツトを殺すのは話が違う。

おそらく状況はそこまで差し迫っていたのだろう。ワズはそれに気づか
なかったか、気づかないふりをしていたかだ。「自分は子供だから」「大人た
ちがどうにかしてくれる」そう言い訳しつつ現実を直視することをやめて
いたのだ。

「あいづらには絶対に言うなよ」

そう言つて木のムロで眠るフルドを見るホザグルに、ワズができること
はただうなづくことだけだった。

自分のできることをする。ホザグルはそれを実行している。ワズがすべき
ことは何か。それは一刻も早く庄に食料を届けることだ。それが山を越えた
目的だ。

「ゆっくりしてはいられないです。一刻も早く行商人さんのところに行って、
一刻も早く庄に食料を届けないといけません」

バーベキューにさそう美月にワズがそう答える。美月はひととき思案の
顔でワズを見つめた。

「その尋ね人はそこで骨になっているよね。骨に話をするつもりなの。ワ
ズ・バーンは死人を復活できるの」

ワズは壊れた荷馬車とその横に転がる頭蓋骨を見る。

「でも、僕はどうしても庄に食べ物を届けないといけないんです」

「確認するよ。食べ物を届けたいんだね。その食べ物はあるその行商人が持

ってこななくてもいいんだね」

「ハイ」

「じゃ、善後策を考えようよ。ま、何につけそれはこの洞窟を出てからのことだね」

「ハ。ハイ」

「よし、休憩終わり。先進むよ。あ、それから。これからはドロップ肉を集中的に集めるからね。斃すときもなるべくつぶさないようにして。美雪、シヤバラ、ひとみちゃん。いい？」

ホールから洞窟の出口までに現れたのは、一匹の狼と数匹の蝙蝠だった。美雪とシヤバラは難なくそれを斃した。その後、その死骸をじっくりと横分吟味した美月が丁寧に解体する。そして、骨と内臓を除いたすべてが背のうちの中に詰められていった。

ワズはその手際に再び感心していた。行きの解体の素早さも十分褒められる早さだった。ホビットの狩人でも上位の者でないとの早さで解体できない。

それなのに帰りは同じような早さで皮をはがし身を切り分けることさえしている。体の小さい蝙蝠の身を切り分けるのもあつという間だ。

ワズが尊敬の目で解体を見てみると美月は微笑みながらこう告げるのだった。

「獣や魚の解体は料理人の基本だからね。これくらいはなんでもないよ」

洞窟を出ると、美月たちは洞窟から少し離れたところに大きなかまどをいくつか作り始めた。ひとみは洞窟の穴の前に縄を張りめぐらせ、そこに鳴子をつけている。どうやら中からモンスターが出てきたときの警報を用意しているのだろう。

ホザグルはそんなひとみを手伝っている。鳴子の縄を張りおえると、二人して川の下流に消え、しばらくすると流木を少し持って帰ってきている。下流に向かうときもそこから戻ってくるときも、二人は手をつなぎ、にこやかに話をしていた。

一方、ワズはこんなキャンプを張るより先に進みたい気持ちのほうが強かった。だが、美月の「もう、フルドたちをここに呼んじやつたんだから、彼らが来るまでは待っててよ」との言葉に言い返すことができず、美月が行う料理の下ごしらえを手伝っていた。

結局、フルドとミルドがまなか、根凌、ロブロスー、ヘルムヴィーグに連れられて河原に着いたのは日が傾き始めたころだった。まなかはフルドと手をつなぎ、根凌はミルドを抱きかかえながら急な斜面を河原に向かっておりてきた。

ホザグルが河原で狼に取り囲まれたのは朝のことだ。助けを求めて走り、美月たちと出会い、ここまで戻る。そして洞窟の探索。ホザグルを助け出して洞窟を出る。美月たちの出会いの場から、フルドとミルドが戻ってくる。

それだけの出来事があれば、日が傾くのもうなづける。

ミルドは川を渡ると、根凌の腕から飛び降り、ホザグルに向かって駆け出した。ホザグルも腕を大きく開いてミルドを迎え入れる。フルドもまなかの手を放し、ミルドとともにホザグルに抱きついた。

「ここまでずっと歩いてきたんだよね。疲れたでしょ。おなかもすいたんじゃない。ごはんの支度するから、みんなで食べようよ」

ホザグルの無事を喜ぶフルドとミルドに向かって腰をかがめた美月が尋ねる。

「うん。ぼくおなかすいた」

ミルドが大きな声で同意して、それを合図に宴が始まった。

確かに美月の料理は一級品ばかりだった。石板で肉を焼いただけのはずなのだが、普段食べている肉とはまるで味が違う。そう美月に伝えると「それはワズ・バーンが手伝ってくれたからだよ」などと齒の浮いたお世辞を言うが、それがリップサービスであることぐらいはワズでも判った。

それでもそう言われれば気分もよくなり、その後の美月との会話も滑らかにいった。

美月は料理をしながらも、ホビットたちと積極的に話をしていった。ホビット一人一人を訪ねては、出来上がった料理や飲み物を手渡し、しばらく話をしていく。

ミルドのような子供にも調子を合わせ、馬になって背に乘せたり、抱き上

げて天に突き出したりしている。背の高い美月の「高い高い」は幼いミルドには面白いらしく、キュツキュツと言いながらはしゃいでいる。

そうやって相手をするのをロブローサーや美雪に任せ、二人きりで話をしていくホザグルとひとみの間に入り込む。それでも飲み物をふるまいながら少し話をする。そしてそのあとはワズのところに来るのだった。

ワズとの話の内容は魔法のことや、普段の暮らしのことだ。普通なら知っていて当然のことも聞いてきたりする。特に普段使っている道具のことは熱心に尋ね、ワズの持っている採取ナイフを物珍しそうにじつくりと見ていた。

ワズとひとしきり話した後、またフルドにちょっかいを出しに行く。

そんな周囲が何回かあり、ふと気づくと美月の姿が見えなくなっていた。

「あれ。ミヅキはどこへ行ったの」

ホザグルと美雪、ひとみと四人で火を囲んでいるとき、美月の不在に気付いたワズが隣に座っていた美雪に尋ねた。

「ああ、美月ね。お花摘みに行ったよ、時間がかかるって言ってたから大きなお花だね」

「大きなお花。それって何の花なの。もうこんなに薄暗いのに。こんな時間に摘みにいかなきゃいけない花なの？」

そう聞くワズにホザグルがポコンとげんこつで叩く。それを見てひとみと美雪が笑いをこらえている。ワズ一人だけがポカンとしたままだ。

「美月は最近便秘気味だって言ってたから、戻ってくるまで、もうしばらく

時間がかかると思うよ」

美雪にそう言われて、『花摘み』が用便の隠語だということに気づいたワズが顔を赤くする。

「真嶋まなかも一緒だし、護衛としてシャバラについて行ってもらったから、心配しなくても大丈夫だよ」

ひとみに言われて改めて周りを見渡すと確かにまなかとシャバラもいなくなっていた。

「もしかして、ワズ・バーンもおしっこに行きたいの」

「イ。イエ。違います」

「美月様が用を足しているところを見たいんだよね。スカートの中とか興味津々だものネ」

「イ。イエ。違います。違います」

ワズは顔を真っ赤にしながら、ひとみの冷やかしを必死に否定した。

美月が再び姿を現したのは、陽がしっかりと沈んだあとだった。どこで用意したのか三つのマグカップと飯ごうを持って唐突にワズの前にやってきた。

「もうこんなに暗くなっちゃったから、今日はここでキャンプだね。明日からどうするか。その相談しようか」

そう言って、マグカップと飯ごうの蓋に黒褐色の液体を注いでいった。そして、ワズとホザグルにマグカップを手渡し、根凌を呼びつける。ひとみに

マグカップを出すように促し、出てきたカップに液体を注ぐ。飯ごうの蓋は美雪に渡し、自分はホザグルとワズの間に割って入り腰を下ろした。

ウトウトとしているフルドとミルドをロブローに任せ、根凌がたき火をはさんで美月の対面に座る。美月は美雪経由で根凌にマグカップを渡した。

「最終目的は可及的速やかにホビット庄に食料を届けること。これでいいよね」

美月が唐突に会議を始める。

「ハ。ハイ」

「でも、目当ての行商人は死んでて、依頼できない」

「ハ。ハイ」

「じゃあ、どうする。ワズ・バーン」

ワズは答えを探して黙ってしまう。美月はホザグルに目を移す。

「どうする。ホザグル」

「山をおいて村か街を探す。そこで食料を分けてもらう。俺かワズがそれを持って庄に帰る。残りはその街の商店に行商をお願いし、一緒に来てもらう」

ホザグルは前から答えを用意していたようにスラスラと答えた。

「食料分けてもらったり、行商頼んだりする対価は。さっき聞いた話だと、そんなものは持ってなさそうだったけど」

「庄まで来てもらえれば、なんだって与える」

その答えを聞いて美月が大きいため息をつく。

「ホザグルは王子様なの？」

「えっ。違うけど。庄は王政敷いてないし。そもそも国レベルとは比べものにならないくらい小さいし」

「じゃ、なんでそんな尊大なこと言えるの」

「ソンダイってどういう意味？」

「偉そうってこと。ホザグルはなんの権力があって『なんでも与える』なんて言えるのよ。それに『与える』って何。『与える』って。人にも頼むのにそんな上から目線でも言うのって、どれだけ偉ぶってんのよ」

「偉ぶってなんかいいない！」

「あっそ。失望したよ。こっちから提案があったんだけど、そんな態度とるなら話にならないね。明日になったら勝手にどっか行きな。私たちはここでお別れ。ま、今晚の見張りぐらいはしてあげるけどね」

そう言って、美月が立ち上がる。ワズは引き止めるように美月の手を掴まえた。

「待ってください。僕もホザグルも『与える』ことができるんです。言い方が気に障ったのなら謝ります。だから座ってください。提案を聞かせてください」

ワズが必死に謝るその様子を見てホザグルも自分の間違いに気づいたようで、すぐに申し訳なさそうな顔になり頭を下げる。

「ごめん。ごめんなさい。つい『与える』って言っちゃったただけなんだ。偉

ぶって言った訳じゃないんだ。ごめんなさい」

美月も美雪もひとみも意味が判らず首をかしげている。そんな中で根凌だけがニヤニヤしていた。

「みなさん。ここはひとつ落ち着いてお話をしましょう。美月様もお座りになってください」

根凌に促されて、しぶしぶ美月は腰を下ろす。そして飯ごうのコーヒーを一口飲む。

「じゃ、話を戻すよ。対価は『なんでも与える』、それで誰でも食料をめぐんでくれるし、商人なら行商にも来てくれるってことね」

「誰でもじゃない。来てくれる人は来てくれるけど、来てくれない人は来てくれない」

「それって、なんのナゾナゾなの」

「ナゾナゾなんかじゃない」

「僕が説明するよ」

ホザグルの口調に再びの決裂を心配したワズが割り込んでくる。

「あのですね。一部の人にはホビット信仰みたいなのがあって、それを信じている人はホビットに友好的なんです。そういう商店を見つければ、きっと助けてくれると思うんです。聞いたことありませんか。ホビットのそういうウワサ」

「知らないよ。そんな話。私たちがいたところにはホビットはいなかったからね。それにしてもなんかもすごく胡散臭い話だね。そんなのに騙される

人なんているんだ」

「いつもの行人さんとは信じている人でした。他にどれだけ信じている人がいるかは判りません。僕もホザグルも今まで庄を出たことがなかったの。正直、僕はホザグルほど樂觀はしていません。年寄りたちは信仰者が少なくなつたとなげいています。今はもうほんといないと言っています。いつもの行人さんさんに会えれば、すぐに来てもらえると思つてました。でも、ほかの人だったら来てもらえるか判りません。というか、たぶん相手にしてもらえないと思つてます」

ワズは淋しそうに下を向く。ホザグルの威勢もなくなる。前途の見通しが暗いことは、ホビットたちも判つていたようだ。

「じゃあ、どうするの」

「山をおりて村を探す。そこで食料を分けてもらう。どのみち、それしかないんだよ」

ホザグルがぼそりつつぶやく。

「ミヅキの提案を聞かせてください」

ワズはすがりつくように美月を見つめた。ホザグルも黙つて美月を見ている。二人に見つめられながら美月は飯ごうのコーヒーを一口飲んだ。

「私たちは商隊なの。ま、厳密に言うとは違ふんだけど、便宜上、商隊だと思つて」

「商隊って商品はどこにあるんだよ」

「待つて、待つて。順番に話すから」

そう言つて話し出した美月の話はそれこそ胡散臭いものだった。

美月の話はこうだ。

自分たちは商隊で、移動中に迷子になった。本体を安全な場所に残し、一部が道を探していた。そのときホビットたちと出会つた。ここがどこなのかも判らない。街道もまだ見つかつていない。多少遠くても庄があるのならそこに行きたい。なんなら商品の中の食料品の一部を分けてもいい。

それは、ホビットたちにとつて願つたり叶つたりの内容だった。

「それが本当ならすぐくうれしいけど、それこそ都合よすぎる話だな。何か裏があるんじゃないか」

ホザグルがそう指摘すると、美月は笑つて答えた。

「当然、裏はあるよ。言えないこともね。でもそれはあなたたちだつて同じでしょ。それに、私たちが手伝えるのは今回だけだからね。毎年二回つつ行商に行くことなんて、しないよ。よっぽど儲かるなら話は別だね」

本当に食料を持っているか確認したいと要望するホザグルに美月は同意する。

「でも、荷車一台分だけだよ。全容は見せないからね。それと、この暗闇の中を車で移動するなんてことしたくないから、ここに来るのは明日になるよ。いいね」

「うん」

「じゃあ、夜が明けたら、一台ここに來てつて伝えてもらうため、ロブロス

ーに飛んでもらうよ。キャンセルするなら夜明け前に私に伝えて」

「判った」

「ま、今晚一晚、ホビットたちでじっくり話し合うんだね」

「うん」

「ハ。ハイ」

二人に返事をもらったところで、美月が立ち上がる。

「と。話がついたところで。小腹減ってない？ 何か軽いものでも作るよ」

そこで、ワズがハタと思ひ出す。

「あ、ホザグルの指、持ってます。それを食べませんか」

「俺の指？」

「うん。狼に食いちぎられた…」

ホザグルが両手を広げる。右の手も左の手も五本の指が揃っていた。

「そういえば、俺の指、食われたはずだよな」

ホザグルとワズは不思議そうに左手を見ている。

「それなら、私が直しといたヨ」

ひとみは当たり前のことのように云い放つ。

「治した？」

「うん。直した」

「ヒトミはヒールの魔法使いだったのですか。やっぱりそうですか。ヒトミ

はヒダ・ヒトミでしたか」

ワズがひとみをフルネームで呼ぶ。

「ええと」

魔法使いと指摘されたことに動揺したひとみが慌てだす。

「違うよ。それは魔法じゃなくて技術」

しどろもどろになりかけたひとみに変わって美月が説明を始める。

「ひとみがしたのは医術っていう技術だよ。魔法じゃない」

「指が生えてくるなんて魔法だろ」

「違うってば。根凌、説明してあげてよ。私は概略しか知らないから。専門

のあなたならうまく伝えられるでしょ」

「判りました。それでは、代わって解説します」

根凌が説明をはじめようとする。

「待って、その間に私は軽食作ってくるから。ワズ・バーン、指、頂戴」

「えっ。本当に食べるノ？」

「ワズ・バーンがそう言うなら、ホビットの中では仲間の肉を食べるのが常

識なんですよ」

「まあ、そうだな。というか、ヒトミは自分を食べてもらいたいと思わない

のか」

「なんでそんな気持ち悪いこと思うのヨ」

「それはこっちが聞きたいよ。食べてもらわなくていいなんて、そんな寂し

いことよく耐えられるな」

ひとみは汚らしいものを見るような目でホザグルを見ている。

「ホザグルはひとみちゃんに自分の指、食べてもらいたいよね」

「うん。当たり前だろ。俺、ヒトミのこといいなあって思ってるもん」

「じゃあ、ひとみちゃん。食べてあげなよ。で、根凌、初級医療概論よろしく」

ワズから指を受け取った美月はそう言い残し、かまどに向かって歩いて行った。

「では医療概説の講義をはじめさせていただきます。ご存知のように、有機生物は細胞から成り立っています。未分化細胞は有機生物のどの構成要素にも変化することができます。指をはやすのなら傷断面の細胞を未分化細胞に変格し、活性化することにより行います。ここまではよろしいですね」

ワズとホザグルは顔を見合わせ、首を横に振る。美雪も横に振りながらひとみを見る。

「私はその程度のこと、ちゃんと知ってるヨ」

一面の雪景色の中で、ワズは美雪、根凌と共に雪洞を作っていた。シャバラと美月は周囲の警邏に出ている。

美月たちが提供を申し出た食料はそれなりの量だった。ただ、ワズの庄と隣の庄のすべてを収穫時期まで賄うまでにはいかない。そこで、緊急分として、美月、美雪、根凌が背負えるだけの食料を背負い、ワズを乗せたシャバラが先行隊として庄へ急行したのだ。

フルドとミルドは残りの食料を積んだ荷車に乗せられてくる。

ホザグルはひとみと商隊にいたスリムな男の人と三人で村か街を探しに

山をおりていった。

ホビットたちが三部隊に分かれて一日半。シャバラは山道、そして雪道を走りっぱなしだった。美雪はそれについてくる。根凌は多少遅れることもあったが、それでも夜のキャンプには追いついていた。

走りっぱなしということもあって、先発隊の進む速度はものすごく速い。もう山頂は越えていた。この分なら、明日の夕方には庄についているだろう。四日以上かけてきた道を三日もせずに戻ることになる。

ドサツ。

雪洞の入り口で音がする。ワズが外に出ると、中型の猪と瓜坊が転がっていた。

「運よく冬眠中の猪、見つけたから狩ってきた」

こともなげにそう言う美月を、ワズは「またか」という目で見つめた。

冬眠中の獣は無防備になる。そのため彼らは見つかりにくいところで冬眠する。狩人でもそう簡単に見つけられるものではない。

それに、そもそも猪は冬眠しない。冬の間は夏ほど活動する訳ではないが、それでも起きて動き回っている。冬眠しない猪は雪に弱く、山のこちら側にはいないはずなのだ。

それなのに美月は昨日も同じことを言いながら猪を狩ってきた。今日の朝も「たまたま見つけた」と言って雪鼠を三匹持ってくることで済んでいる。

いないはずのもの、いたとしても希少で見つけにくいもの、それを何頭も

狩ってくるのだ。洞窟の時も非常識の強さだったが、ここでも非常識の結果を残している。それに対してワズはもう呆れることしかできなかった。

美月がとってきた獲物は、彼らの朝晩の食事となった。だが、その量は先発隊五人で食べきれぬ量ではない。残った分の半分は後続の荷車部隊用に目印をつけて雪の中に埋めた。そして、もう半分は周りを雪で固めたのち美雪の背の背負子に収まっていた。

「昨日はステーキにしたから、今日は鍋にしようか。牡丹鍋、久しぶりだなあ。野菜がないのがちょっと残念だね」

美月は楽しそうに独り言を言いながら、かまどを作り始めた。

次の朝、出発してしばらくすると、霧が出始めた。その霧が徐々に濃くなり、雪も降りだす。しまいには吹雪の状態になってしまった。

濃霧とものすごい吹雪で、後ろを走っているだろう美月や根凌の姿は見えない。それどころか、すぐ横を走っているはずの美雪の姿さえ見えないほどだ。それでもシャバラは速度を落とさない。吹雪で視界がないため、案内人のはずのワズでさえ道を失いそうになるのに、シャバラは躊躇なく走り続ける。

何故迷わないか聞くと「複数の亜人の匂いがある」とだけ返ってきた。

真っ白な世界で雪道を走り、森を走り続ける。やがて吹雪がいくぶんやわらぎ、少し見通しが良くなるとその速度はさらに増した。

その結果、庄に着いたのは昼を過ぎたころだった。

ワズは朝に打ち合わせた通り、一番手前の穴の扉をガンガン叩いた。
「ワズです。ワズ・バーンです。食べ物を持ってきました。庄のみんなを広場に集めてください」

その家に住んでいるのはベルグとグリンの夫婦だ。

「ベルグ。グリン！」

ワズが叫びながら扉を叩き続けると、ガチャリと音がして扉が開く。

「ワズ？　ワズかっ。どこへ行つたのだ。ホザグルはいるのか」

「食べ物を持ってきました。みんなに、全員に集会所の前の広場に来るように伝えてください」

「八日間もどこに行つたのだ。みんな心配していたのだぞ」

「食べ物です。持ってきました」

お互い言いたいことを言い続ける二人の会話はかみ合わない。その様子を見に来たのかグリンもベルグの後ろにやつてきた。

「こんな雪の中を子供たちだけで出かけるなんて、何考えてる」

そう言つてワズにねじり寄ろうとするベルグの前に白い壁が立ちはだかった。

ベルグは突然現れた壁を見上げた。そこにはベルグを見下ろす美雪の顔があった。

美雪はニコツと笑い、ベルグの足元に持っていた猪肉を放り投げた。

「わたくしはあなたたちを助けに来ました。わたくしが来たからには、飢えることはありません。人を広場に集めなさい」

ペルグは足元の肉と美雪の顔を交互に見ている。

「ペルグ、グリーン。人を集めなさい！　みなに食事を与えます。至急、全員を集めなさい」

動こうとしないペルグに美雪が強い口調で言い渡す。ペルグは美雪の顔を見て、もう一度肉を見る。そして一歩さがり、深々と頭をさげる。

「ありがとうございます。白い女神様。ありがとうございます」

「礼はいい。まず動きなさい」

「はいっ、女神様。グリーン、お前はみんなにこのことを伝える。俺は。俺はペリフェのところへ行く。早まるなよ、ペリフェ」

そう言い残し、ペリグは雪道を走り出した。グリーンもあわてて隣の穴の扉に向かっていく。

そしてすぐに「女神様が来てくださったよ。出てきて、みんなを広場に集めて」と叫ぶグリンの声と「ペリフェ！　はやまるな。女神様が、白い女神様がいらっしゃった。助かるぞペリフェ。はやまるな」と扉を叩くペルグの声が庄に響き渡った。

それからの庄は大騒ぎだった。続々とホビットたちが美雪の前に集まってくる。大ぜいに取り囲まれながら美雪たちが庄の中央の広場に移動する。広場に着くと、雪の降る中、美月はかまどを作り、ブロック肉を焼き始めた。そしてその横で穀物の粉と近くに積もっている雪から重湯を作り、その中にミンチにした肉を入れていく。焼いた肉をスライスしたり、重湯を椀に

よめるのは、ホビットたちに命じて任せていた。

はじめは雑然と広場に押し寄せていたホビットたちだが、ワズが誘導して、調理の手伝いができる者と、配給を受ける者の列へと変えていった。するとそれは、あつという間に食べ物をもらう長蛇の列があらわれた。

美雪はシャバラをつれ、配給の先頭でにこやかにただ立っている。肉や重湯をもらった者は一様に白い女神様に感謝の念を表していた。

根凌は列の中や周囲で重湯を飲んでいるホビットたちの中から衰弱の激しい者を見つけると、集会所の中に連れていき、投薬と医術を施した。

庄の住民は全部で八十人ほどだ。そのほとんどが広場が集会所に集まっている。騒然としていた場も二杯目、三杯目のおかわりが済むころには、落ち着きを取り戻していった。

「白い女神様。ありがとうございます」

おそらくは庄の長老と庄議会の議員たちなのだろう。一人の老婆が四人のホビットを従え、美雪の前できてひれ伏す。

「立って。私は美雪。女神じゃないよ。なぜあなたたちが私のことを女神と呼ぶのか判んない。とりあえずみんな立って」

長老と思われる女性がその言葉で顔をあげ美雪を見る。そして、その横に控える茶斑犬に目を移すと、慌てて再びひれ伏す。

「お戯れを。女神様」

「なんなの一体。本当に違うってば。私はワズ・バーンとホザグルに頼まれ

て、ここに食料を持ってきただけ」

ホザグルの名を出した途端、長老の横にいた男が顔を上げ、キョロキョロしだした。

「ホザグルは。ホザグルはどこにいたのでしょいか」

「ホザグルは行商人と交渉するって街へ向かったよ。フルドとミルドは後発隊の荷車と一緒に来るから、ここに来るのは明日か明後日かな」

「行商人？ 荷車？」

質問した男は美雪の言葉が理解できないようだ。

「ああ、ええと。ワズ・バーン。説明してあげて。ホザグルのことや、私は女神なんかじゃないってこと」

ホビットは小柄な種属だ。住居は斜面に穴を掘った穴倉形式が多いが、内部のスペースは彼らの体形に合わせて小さい。人間種として標準女性サイズの根柢は別として、大柄な美月や美雪、超大型犬のシャバラにはホビットの棲家は狭すぎた。

年に二回くる行商人や、数年に一組程度の割合で迷い込んでくるホビット以外の種属のための宿もあるのだが、それは簡易宿で安らげるところではなかった。それで、「これなら野宿のほうがまし」との美月の一言で、庄のはずれに大きめの雪洞を掘り、美月たちはそこで身を休めていた。

「ったく。恥ずかしいことは全部私に押し付けろんだから」

美雪が頬を膨らませて不満を漏らす。

「しょうがないじゃない。女神様は美雪で、私じゃないんだから」

「そうだとしても、仕切るのはギルドでのポジション的に美月の仕事でしょ」

「姉妹のポジション的には美雪が仕切っていいんじゃない？ ねっ、お姉ちゃん」

「そう思ってるなら、普段から姉を敬いなさい」

美月は「はい」と心のこもっていない返事をしながら笑っている。

「で、これからどうするつもり？ ギルドマスター」

美雪が発したギルドマスターの呼称に美月はちょっとだけ真顔になる。

「ホビットたちの出方によるけど、私たちを受け入れてくれるなら、みんなの間に入って情報収集だね。受け入れてくれないなら女神様の威光に頼ることになるかな」

「否定した直後に、今度は『本当は女神だよん』って言わせるつもり？」

「『おまえらを試したのじゃ』とか言っとけばいいのよ」

「ったく。他人事だと思って」

「ま、そのときは私もギルマスとしてフォローするから。頑張ってね、お姉ちゃん」

「はいはい」

「シャバラはどうする？ 情報収集に参加する？」

「食料はまだ足りぬのである。我は狩りに出るとしよう」

「狩りか。でも、この辺、雑魚雑魚しかないよ」

「一昨日、通ったところに、ジャイアントボアがいた」

「ああ、あれね。あれもシャバラには雑魚だろうけどね。よし、じゃあ、シャバラは『狩り』と。根凌は情報収集、付き合ってくれるよね」

「私は往診をいたします。先ほども幾名か来ていない者がいたようです。聞いたところ具合が悪く起き上がれないとか。その者らの治療を行いたいと思っています」

「おお、医者っぽいこと言うね」

「こう見えても、私、根凌《インリン》オブ。女医でございますから」

炊き出しをしていた美月が、手伝っていたホビットにブロック肉を数個渡し、「適当に切り分けてみんなに配って」と言い「後はよろしく。私たちはちょっと休憩させてもらおうよ」と庄のはずれに移動してから、ワズは集会所の中の一室に連れ込まれた。そこはいつも庄会議が行われる部屋だった。そこでワズは長老や議員たちに立ち替わり入れ替わり質問されるのだが、同じ質問を何回もされたり、ワズの知らないことを聞かれたりがほとんどで、臨時の庄議会は遅々として進行しなかった。

ホザグルについては庄議会の書記をしているホザグルの父が執拗に尋ねてきた。同行することになったフリルの少女や美形の男の人のことまで聞いてくるが、ひとみはともかく男の人は顔を合わせた程度で、名前も覚えていない。

彼らが何者かと問われても、答えられるのはひとみが医術を使えること

ぐらいだ。そこからさらに踏み込んで、医術と治癒魔法の違いを聞かれても、根凌の講義の内容をたどたとしく言うだけで、ワズ自身が理解していないものを、つたない言葉で伝えても話を聞いている側が理解できる訳がない。

不毛な質問と的を射ない答えが繰り返され、全員にイライラがつのっていく。ワズに向かって声を荒らげる議員が出だすと、ワズの限界も越えてしまった。

「お母さん！ 会いたいよう」

ワズはそう叫び、大声で泣いた。そして、一切の質問を拒否した。以降は議員たちが何を言っても、ただ泣くだけだ。

長老にはそれが泣きまねであることが判ったようだが、自分たちの行いも大人げないものだと認識したのだろう。今後は議会が直接美雪たちと話をする事として、ワズを解放したのだった。

言い伝えでは、ホビットが窮地に陥ると白い女神が黒い巨大狼を引き連れ、助けに来るとなっている。その姿は髪も肌も透き通るように白く気高いという。子供が狼でなく、大型の茶斑犬という違いはあるが、現れたタイミングやその姿は、美雪はまさに白い女神そのものだ。

それでも美雪はそれを否定した。ワズもグループリーダーは美雪ではなく美月だと証言している。そのことから、議会としては美雪を女神として扱わないこととした。ただ、女神であれ、そうでないしろ、彼らが救済者で

あることに違いはない。最大限の対応を取るべきなのは変わりなかった。

以降の美雪たち行動も女神にふさわしい動きだった。具合が悪い者の穴を訪ね、治療する。狩りをしてきたと言ってさらなる肉を供出する。ホザグルの父の案内の元、隣の庄まで茶斑犬のそりを走らせ、食料を分け与える。すべての行動が住人からの称賛を受けている。

中でも一番感謝をしているのはペリフェだ。ペリフェの娘パフェリネは生まれたときから病弱だった。そのこともあり、今回の飢餓で口減らしの候補にあがっていた。美雪が食料を持ってきたことにより、その命が繋がった。そして、根凌の医術と投薬により寝たきりだったのが、つかまり立ちができるほどに回復したのだ。

まさに魔法を使ったとしか思えない結果だが、根凌は頑なにそれを否定した。あくまで医術は技術だとして譲らなかったのだ。

根凌は医術のほかにも各種の講演を開いていた。「肉が腐る仕組みと腐らないようにする方法」「アロエトリフイドからのポーション作成術」「細部活性化による自己治療」

どの話も言葉が難解で理論は理解できない。だが、実技は何回も繰り返し実演されたため、受講していたホビットにもある程度習得でき、それらは、今後、保存の護符に頼らない生鮮品の保存や、傷の治療に役立ちそうだった。

美雪は庄議会と話をし、シャバラは雪の中、ホビットの狩人と狩りに出ている。根凌は往診と講演。美月は根凌の往診について行ったり、庄の子供と

遊んだり、若者と馬鹿話をしたりで、あつという間にホビットたちの間に溶け込んでいった。

そして、美月たちの到着から二日。フルドとミルドを乗せた荷車が庄にたどり着いた。後発隊はフルドとミルドを入れて十名。ロブ羅斯とヘルムヴィーゲ、まなかのほかには二匹の鼠人、ずんぐりむっくりの中年男、子供にも見える小さな猫人、そして黒斑の犬だった。

その一団が広場までやってくると、彼らを見ようとして多くのホビットたちが集まってきた。そのころ合いを見繕って美月が荷車の前に出る。

「みなさん、お集まりいただきありがとうございます。我が闇面のワゴンセールによろこそ。今まではポランティアサービスでしたが、これからは商売とさせていただきます。取り急ぎそろえた品のため、品数は多くありませんが、いずれの品も皆様のお役に立つものばかりです。ぜひお誘いあわせの上ご来店ください」

そう口上を述べると深々と頭をさげる。それに向かって若者の一人が「なんだよ、ミツキ。タダでくれるんじゃないのかよ」とヤジを飛ばす。それに對し美月は「こっちは商売なんだからタダの訳ないでしょ。今までの肉は広告費なんだから。これからはがつり儲けさせてもらうよ」と切り返している。そのあと、互いに笑いあっているとところを見ると、すっかり打ち解けて仲間意識さえあるうえでの軽口なのだろう。

「じゃあ、店番娘《みせばんこ》、あとはよろしくね」美月はそう猫人に声をかけ、荷車から離れていく。猫人は「いらっしやいませえ。今日は初お目

見えなんでも、オープン記念のタイムセールしちゃいます。見るだけでもいいのでえ、皆さん来てくださあい」と呼び込みを始めた。

庄の世帯は全世帯で三十戸ほどだ。二日もみんなと話を続けていれば、各世帯の経済状況は見えてくる。配給は所得に関係なく受けられる。それが販売となると、手持ちのない者は食料を得ることができない。今の飢饉の状況では貧富の差が生死を分けることになってしまふ。

それに対して美月がとった方策は二つ。一つは食料品は世帯当たりの購入個数制限とするタイムセール。もう一つは、店の手伝いを最底辺の世帯から選び、代価として商品を与えることだった。

後発隊が持ってきたものは多くない。いろいろな獣やモンスターの燻製肉。麦の粉や米粉などの穀物が少々。食料はそれだけだ。他は採取用ナイフ、調理用ナイフ、矢じり、保存の護符、そして薬ぐらいだった。

初日のセール後、店番娘が店を閉めると宣言すると、そこへ長老が議員一人を引き連れてやってきた。売れ残った食料品はすべて庄議会が買い取るというのだ。庄議会も一部の者による買い占めを案じていたようで、その提案を持ってきたのだ。

美月は公平分配などの条件を付けたうえで、その提案を受け入れた。その結果、一日にして荷車の上から食料品が消えたのである。

翌日からは、庄のあちらこちらで商隊のメンバーの姿を見かけることが

できた。店番娘は売れ残っている日用品の販売を続けていたが、ほかの者は店番の手伝いをしたり、適当にホビットを捕まえては話をしたり、ホビット庄の特産品である幸運の護符作りの見学をしたりと、気ままに過ごしていた。

それが続くこと二日。その日の夕、美月と美雪が庄会議を訪れた。

「もう、売るもんも少なくなっちゃったから、明日の朝、引き上げるよ」

それに対して、長老は形ばかりの留意を促す。

「まだ、いいではないですか。庄の恩人をこんなにすぐ帰す訳にはいきません」

「そうはいつでも、私たちがいつまでもここにいて、仕事もせずに食べまくるつても本末転倒でしょ。そろそろお暇《いとま》するよ」

「そうですか、それは淋しくなります」

食料を届けに来て、その食料を自分たちが食べる。確かにそれは本末転倒だ。しかし、美月たちは持ち込んだ食料に手を付けていなかった。どこで調達しているのか、はたまた自分たち用は隠し持っているのか。どちらにせよ商隊が消費する全ての食べ物とは自前で用意していた。

にもかかわらず、長老は美月たちがいなくなることを喜んだ。それは彼らがホビット庄に急激な変化をもたらしているからだ。

ホビットのほとんどは生涯を庄の中で過ごす。山を越える者は数えるほどしかない。隣の庄に行ったことがない者さえいるくらいだ。

それが普通であったのだが、美月たちの来訪により、若者たちの中に外の

世界へ興味を抱くものが出はじめたのだ。

年寄りの中には変化を嫌う者もいる。長老もその中の一人だ。相手が女神かもしれない者、少なくとも恩人である者に感謝の念はあるが、それと伝統を守ることは別問題だ。だが、退去をホビットたちから持ち出すことはできない。美月の申し出はまさに渡りに舟だったのである。

熱烈な感謝しかなかった日から、わずか数日でそう思ってしまうのは恩知らずだと判っているが、庄をまとめる立場からは仕方のないことと長老は自分に言い聞かせていた。

それ故、その夜、ワズとベリフェが長老の住む穴を訪れ、下賜の提案をしたときも、後ろめたさを持っていた長老は、その解消のため二つ返事でそれを受け入れるのだった。

翌早朝、出立の準備をしている美月の元へワズがやってきた。そして、出立前に感謝をしたいから庄の外れまで来てほしいと告げた。美月はそれを固辞するが、ワズは頑として要求を取り下げない。美月はこれ以上の交渉は時間の無駄と判断し、ワズの要求を受け入れた。

ただし、全員来てほしいというワズに対し、荷物番として、二匹の鼠人とまなか、そして店番娘はここに残すことは認めさせた。

案内された場所は傾斜地に形作られた庄の最上部だった。そこにはホビットが住むには小さすぎる穴が一つ空いていた。その穴の前に長老とベリフェが立っている。庄の住人も多く遠巻きに集まっていた。

「なんか『いかにも』って感じのところだね。あの穴、白い女神様でも奉つてる祠《ほくら》なの？」

長老が待ち構えるところに向かいながら、右横を歩いているワズに美月が尋ねる。

「白い女神様ではないです。儀式を行う場所です」

「ふうん。儀式ねえ」

美月は左横の美雪をちらっと見る。美雪はそれに気づいていないのか眉間にしわを寄せて歩いている。

「この度は庄へのご支援、誠にありがとうございます」

美月たちが立ち止まり、雑然と正対すると、長老は朗々と口上を述べはじめる。ワズは口上の最中に美月の横から長老の左手へと移動していた。

「庄としましては、まだまだご逗留いただきたいところではございますが、商隊の方々もお忙しい身。お引止めするのもかえって失礼でしょう。名残惜しくはございますが、ここは涙をのんでお見送りいたします」

長老のセリフは芝居がかっている。そのことで美月の右眉があがる。

「代表者。前へ」

長老は美月たちの代表が美月なのか美雪なのか、まだ判断つきかねていた。名前前で呼ばずに立場で呼称したのはそういう理由だった。だが、その呼びかたも命令口調なのも美月は気に入らない。不快感を隠さないまま、一群から半歩前に出た。

美月が前に出たのを見て、長老は「では」と言いながら懷に右手を入れる。

美月をはじめとする商隊の全員がその右手を見つめる。その手が動き、金属の棒状のものが頭をのぞかせる。

その瞬間だった。

ガサツと音がして空気が動いた。その場にいたホビットたち全員が異様な気を感じ、音のした方向、すなわち美月たちを見た。そこには美月を中心として戦闘隊形を取る一団があった。

先頭は盾を前に突き出し、その後ろに身を隠しているヘルムヴィーゲ。その横、少し後ろに茶斑犬。その二人に護られるように美月。美月の左隣には美雪。右隣りにはロブ羅斯ー。美月の背後で背を低くしているのは根凌とノームの中年男。そして、後方を護るのは黒斑犬。

根凌とノーム以外はいまにも戦いを開始しそうな体勢で長老を睨んでいる。

「亜人の長よ。武器を捨てろ」

茶斑犬が唸るように吠える。長老は何が起きたか理解できないようで、ただ美月を見ている。

「長を名乗る亜人の女よ。武器を捨てるのだ」

再びシャバラが吠える。その声で我に返った長老が懐に入れた自分の手を見る。

「この錫杖は武器では…」そう言いながら、棒を取り出したとき、盾と茶斑犬が雪けぶりをあげて長老にびかかった。

舞い上がった雪が落ち着き、視界が回復してきたときに見えてきたのは、盾で雪の上に押し付けられた老婆。そして、二本の銀の錫杖を両前足で押さえている茶斑犬だった。

「ヘルムヴィーゲ、盾の下にも杖がある。それをこっちへ」

美月がヘルムヴィーゲに声をかける。美月の声は冷静だ。冷静過ぎて怖さを感じるほどだ。

女騎士が盾を見ると、確かに押しつぶされた長老の腹の横で錫杖の頭が出ていた。ヘルムヴィーゲは左手に体重をかけ盾を押さえたまま、右手で錫杖を抜き取る。そして長老をにらみつけ、美月に向かって短い杖を放り投げた。

銀の錫杖は放物線を描いて美月の右手に収まる。美月は右手を右目の前に持つてくると、左のこめかみを左手の中指でつつきながら、じつくりと調べる。

長さは、美月が指を広げたときの親指の先から小指の先より少し長い程度。形状は錫杖なのだが、小柄なホビットが使うにしても極端に短い。輪の部分も杖の部分も銀でできていて、全体に細かい細工が彫られている。その彫の部分がいぶし銀に輝いているところを見ると、大事に扱われている年代物なのだろう。頭部の輪の左右についている遊環は三つと二つで、一つ足りないが、それは経年劣化による破損なのかもしれない。

「星願？」

じっと検分していた美月がそうつぶやく。それを聞いた美雪が横目で美

月を見る。

美月は短錫杖を投げ返す。それはくると回転しながらワズのすぐそばの雪に突き刺さった。

「ヘルムヴィーゲ、シャバラ。さがっていいよ」

その命で女騎士と茶斑犬が美月の一步前まで戻ってくる。二名が離れたのを確認すると、倒れていた長老が雪を払いながら立ちあがり、美月を非難の目でにらみつけた。そして、その口が開かれようとしたとき、美月の低い声が発せられる。

「言い訳は聞かない。錫杖は武器だ。どのような用途でそちらがそれを使うかなど、こちらはあずかり知らない。なおかつ武器放棄の要求に対し、武器を取り出す行為は明らかに敵対行為だ。殺されなかっただけありがたいと思え」

長老はただ口をバクバクさせているだけだ。美月は視線を長老から、その隣に立つワズに移す。

「ワズ・バーン。あんたもそちに立ってるってことは、この茶番の意図を知ってるってことだね。話があるんだったら、以降はその信用おけないクソ婆あに代わって、あんたが仕切って」

いきなり振られたワズはあつげにとられ「ハ、ハイ」と言うだけで、それ以降は何も発しない。

「黙ってるってことは、何もないってことだね。じゃあ、これで引き揚げさせてもらうよ。私たちもそんなに暇じゃないから」

美月が立ち去るフリをする。美月を取り囲んでいた者たちも、戦闘態勢を解いた。

「ちょっと待ってください」

そう言っ、ワズはあわてて足元の錫杖を拾う。それを見たペリフェも、さきほどシャバラが押さえつけていた二本の錫杖を拾い、一本を長老に手渡している。

「ミヅキがお願い事をするしたら何をお願いしますか」

「何よ唐突に」

そう言っ、美月はワズを見る。ワズはちらりと後ろを振り返って、祠を見た。

「初詣のお願い事でもしろっていうの」

「三つ。お願い事、三つ。何ですか」

「初詣の願掛けだったら、家内安全と無病息災と世界征服でしょうが」

「はあ、世界征服？ 世界平和じゃなくて」

美雪が即座に突っ込みを入れる。

「何言ってるの。世界征服は世界平和の上位互換でしょうが。私たちが世界を征服すれば、私たちの望む世界平和が得られるんだよ」

「や、や。征服は戦いで、平和とは真逆でしょ」

「征服の結果、平和になるんだから、結果的には同じでしょ。そもそも美雪は争いのない世界なんて本当に求めているの？ 本当の世界平和になっちゃったら、モンスター種や人間種を狩ることもできないんだよ。奥に眠ってい

るお宝を求めてダンジョンを攻略することもできないんだよ。単なる世界平和っていうのは、どこかの誰かが私たちの支配者になって、争いごとはするなっていう圧政を施くこと。そいつの思う世界を私たちに押し付けること。私はそんな世界はお断りだね。世界平和を目指すなら、私たちがこの世界を支配して、私たちの望む『世界平和』を実現するしかないでしょ」

熱弁する美月に美雪はややあきれ顔だ。

「初詣のお願いが世界征服ねえ。ま、美月がそう言うんなら、私はそれでいいけどね」

「ちょ、ちょっと待ってください。世界征服は判りますが、カナイアンエンとムビヨウソクソクって何ですか」

おそらく、美月と美雪が世界征服論を論じているときから聞きたかったのだろう。話が一段落したと見るや間髪を入れずにワズが尋ねてきた。

「家内安全と無病息災。家内安全は、私たちのギルド『ダークサイド・オブ・マイ・マインド』の本拠地が火事や戦争なんかの災害に巻き込まれませんように。泥棒とかの招かねざる客が入り込みませんように。っていうお願い。無病息災は私たちのギルドのメンバー全員が、死んだり、大きな病気にいかったり、大きな怪我をしませんように。ってこと」

ワズはそれを聞いて「カナイアンゼン」とつぶやいている。

「そのムビヨウソクサイの対象となる怪我はどの程度のものでしょうか」

ペリフェが首をかしげながら聞いてくる。

「死に至るような怪我や病気。腕や足がもげるような怪我から身を護られ

ばいだけで、擦り傷、切り傷程度はしょうがないんじゃない？ どう思う？ 美雪」

「なんで私に振るのよ。ま、いいんじゃない、美月がそういうのなら、それで。戦闘中は転がって擦りむいたとか、剣で斬りあいしていて、ちょっと斬られちゃったとかは日常茶飯事だしね。それまでなくてはなんてずうずうしいこと、神様にはお願いできないもんね」

「って、ことでいい？」

「ムビヨウソクサイとはそういうものですね。判りました」

ペリフェはそのあとぶつぶつと何かつぶやいてから長老を見る。

「世界征服ねえ」

長老はため息をつく。

「その三つの願い、叶えてしんぜ（ウィ・ウィル・グラント・ユー・スリー・ウィツ）」

「断る！ 断じて断る」

即答だ。まだ長老がしゃべり終わっていないタイミングという即答以上の速さでの拒否だ。

ホビットたちは拒否されるとは思っていなかったらしく、美月の拒否発言に、みな、口を開けてフリーズしている。

「どうせ、願いを叶えるかわりに魂をよこせとか。発言のあげ足を取るような不幸を押し付けたりするつもりなんですよ。そんなのはまっぴらごめんだね。初詣のお願い事なんか叶う訳ないって判ってるから、するもんなんだ

から、かなえてくれなくて結構。それに『叶えて進ぜよう』なんて上から目線、超むかつく」

「見返りを求めたり、不幸を押し付けたりはしない」

長老が抗議をするが美月はそれを無視してワズを見つめる。

「ワズ・バーン。要はこれでおしまい？」

「ハ、ハイ」

「じゃ、私たちはこれで引き揚げるから。…で、その前に一つだけ、老害に忠告しておくよ」

美月は冷やかな目で長老を見る。

「今回の飢餓で庄を救ったのは、ここにいるワズ・バーンとホザグルだよ。

まさかそれは否定しないよね。庄議会のあなたが何をしたかというところ『何もしていない』もしくは『何もするなと命じた』ってこと。もし、ホザグルとワズ・バーンがそれに従っていたらどうなった？ 庄は全滅だっただろうね。それはあなたが『何もしないことを決め庄を滅亡に追い込んだ』ってこと。『庄の全員を殺した』ってことに他ならないんだよ」

美月はここで息をつき長老と祠を見る。

「伝統を守ることが悪いとは言わない。古くから伝わる『ホビットらしく』生きることの中にもいいことがあるかもしれない。でもね、それは生き残ってこそでしょ。行動すべき時は行動しなきゃいけないんじゃない？ たたえその行動が伝統にそってなかったとしても、動くかなくてはいけないときには動くべきなのよ。伝統を守ることと自分たちの命とどっちが大事だ

と想ってるの。伝統を守ることによって死ぬのであれば、そんなのは伝統ではなくただの悪習よ。あなたたち老害はおそらく若者たちより早く死ぬ。庄の未来はホザグルやバフェリネやミルドのためにあるんだよ。そして今回、庄を救ったのはホザグルとワズ・バーン。功労者はこの二人。それ以外の者はまるで役に立っていないからね。それどころか、あなたたち老害は庄を滅亡へ導いた極悪人。そんな極悪人たちがこれからも上から目線で庄を支配して、再び破滅の道に進ませるのがいいことかどうか、十分吟味して進退を決めるべきだと私は思うね」

長老は何か言おうとするが、ぐっところえ口をつぐむ。

「庄を救った救世勇者ホザグルと魔法賢者ワズ・バーンに誉《ほまれ》あれ！」

美月はそう叫び、その場を後にした。

ケンカ別れのような旅立ちだったが、それでも十数名のホビットが出立の見送りに来た。「そこまで送る」と言っについてこようとするワズたちに、美月は強い口調で固辞し、逃げるような駆け足で雪けぶりを上げながら、あっという間に姿を消した。

美月たちがホビット庄を出発してから五日後。二台の荷馬車の行商団が山の中腹でキャンプを張っていた。一隊は総勢十名。その中にはホザグルとひとみ、そして細身のイケメン男、佐久間涼の姿が含まれていた。

まだ陽は残っているのだが、その時刻でキャンプとなったのは、ここでのキャンプを涼が強烈に提言したからだだった。道を知っているホザグルが言うには、このペースで進むと、間もなく雪道に変わるとのことだ。そして、ここ以降には開けた場所も少なくなるとのこと。ならば、明日からの雪道に備えてここで準備しておくべきだと、涼が主張したのだ。

今日のキャンプ地が決まってから、行商団はテントを張り、食事の準備を行っていた。それが一段落したところを見計らって、涼が行商隊の女に何かを話しかけた。女は洪つたように首を振り、涼の手を握る。涼は女を抱き寄せ耳元で何かをささやく。すると女は顔を赤らめ手を離れた。

そして女の手を離れた涼は、視線を背中に受けながら一人山道を登っていくのだった。

山道の端に人の背の半分ほどの岩が転がっている。その岩に涼がひとり座っていた。

「よっ、久しぶり」

突如として道に現れた美月が涼に声をかける。涼はスツと岩から滑り降りた。

「俺に会えなくて寂しかったか」

涼の右手が美月の左頬に添えられ、クツとあごを下に押し下げる。涼の見上げる視線と、美月の見下げる視線が交差する。美月はすぐさま涼の手を邪険に振り払う。

「やめてよ、気持ち悪い」

「照れるなよ。他に誰もいないんだから、素直になれよ」

涼がニタリと笑うと、それが合図だったかのように、美月の背後に、美雪とシャバラ、垠凌、ロブロス、ヘルムヴィーゲ、そして一匹の鼠人を従えたまなが現れる。それを見た涼はスツと美月から離れた。

「言われていた場所でキャンプを張りました。責任者に紹介しますのでついてください」

周りの目を意識した丁寧な話し方へと変わった涼が、先頭に立って歩きます。そして一行は黙ったまま山を下って行った。

涼に紹介された行商団の団長はややトウが立った女だった。紹介された後、なぜか美月に向かってにらむような視線を向けてきたが、それでも口調は完全なビジネス口調を崩さなかった。美月のほうもルトリと名乗った女団長をじろりと検分し、以降はビジネスライクに接した。

涼とひとみのこれまでの迷惑料として、鼠人のミンチ肉のソーセージを鼠肉とは告げずに大量に贈る。ホビット庄の現状を伝え、合わせて隣の庄のほうが困窮しているため、そちらのほうに儲かる旨を報告する。その見返りとして、行商団が持ち込んだ商品を一式見せてもらっていた。

商品のほとんどは穀物だった。粉にしたものが大半を占めているが、モミがついている麦や米もそれなりにある。おそらくモミ付きは春に植えられる種モミになるのだろう。

ホビットたちの作る幸運の護符は、ホビットたちの地域紙幣としてもつかわれている。美月は庄で受け取った大量の護符を何枚か女団長に渡し、持ってきた全種類の種モミを少量ずつ分けてもらった。その間じゅう、ルトリが涼をずつと横に置いていたことに、美月は苦笑いだった。が、その笑いをどう勘違いしたのかルトリの美月を見る目にさらにケンが増した。

翌朝、ルトリとホザグルは不機嫌だった。それは涼とひとみが行商団を抜け、美月たちと行動を共にすると宣言したからだろう。美月はそれをうまく処理することも、担当者の仕事だと思っている。だが、彼らの不機嫌の矛先は、当該担当者ではなく美月に向けられていた。美月はそのことを心の中で憤慨するが、それを顔に出すことはしない。ルトリには「よい商いを」とあいさつし、ホザグルには「庄を頼むよ救世勇者」と声をかける。そして、去っていく行商団を見送る。女団長とホザグルは最後尾で何度も振り返りながら山を登って行ったが、やがて彼らの姿も見えなくなった。

「ふう。お子様のお相手は疲れたヨ」

「俺も今回は疲れました」

行商団が完全に姿を消すとひとみと涼がため息を漏らす。美月にも言いたいことはあるが、彼らが貧乏くじを引いた功労者であるのは事実でありそのことを正しく評価しているため、ただ「お疲れ様」と声をかけるのどめている。

「ああ、ひと暴れしたいヨ。しばらく、ギルド迷宮に潜らせてネ」

「だめだよ。迷宮も今はフレンドリーファイアが有効なんだよ」

「ええっ。そんなのないヨ。それじゃあストレス解消できないヨ」

「うーん。じゃあ、まなかちゃん。崖の切り崩し、ひとみちゃんにやってもらって」

「うん。判った」

「ひとみちゃん、思いっきり魔法ぶっ放して。詳しくはまなかちゃんに聞いてね」

「うん。判んないけど、判ったヨ」

ひとみは首をかしげながらもうなづいた。

「俺もストレス解消で、少し休ませて…」

「何言ってるの。情報収集が忙しい時に。情報参謀のあんたが休める訳ないでしょ。それじゃなくても、あんたがいなかったここ数日、私とワイティで回してたんだよ。やるべき仕事が溜まってるんだから、くだらないこと言っていないでさっさと働いて」

涼が話し始めると、美月は即座にそう拒否した。